
仮面ライダーキバ×スイートプリキュア！重なる2つの組曲

D P O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーキバ×スイートプリキュア！重なる2つの組曲

【Nコード】

N5375W

【作者名】

DPO

【あらすじ】

ディケイド達がいなくなってから数ヶ月後、スイートプリキュアの世界に仮面ライダーキバこと、紅渡が仲間を引き連れて、この世界にやってきた！運命の組曲が今始まる！

洞窟のオーラと始まり（前書き）

紅先生が分かり憎いっておっしゃったので急遽作りました。
全ての始まりです。
ではどうぞ

洞窟のオーラと始まり

ここは、とある山の中。複数のファンガイアが洞窟に逃げ込んでいた。

ラット1「はあはあ、ここまでくれば奴も追って来れないでしょう。」

「
?ファンガイア「うむ、そうだな。しかし奴め!欲も我々の同房を!
!」

キバEF「追い詰めたぞ!」

ダークキバ「さあ、大人しく投稿しろ!!さもなければ、キングとして処刑する!」

ラット2「しまった!見つかったか!!」

ラット3「お逃げくださいボス!ぎゃあ」

ガルルが不意打ちを掛けてラットの一体を始末する。

?ファンガイア「くつだが一足遅かったな!見ろ!」

洞窟の奥にはどこかにつながっているオーラがある。

キバEF「あれは?」

?ファンガイア「どこかの世界に繋がるオーラだ!ではさらばだ!」

?ファンガイアとラット達は物凄い速さでオーラの中に逃げてしまった。

ダークキバ「くつ逃がすか! うん?お前たちは!」

他のダークファンガイアの邪魔をしてきたので全員が戦う。

それから、数分後、

太牙「くそまた奴を逃がしたか!!」

渡「だけど兄さん行き先はわかったよ!」

太牙「本当か!!一体どこなんだ渡!」

渡「加音町と言う町だ。」

太牙「ならすぐに出発だいくぞ!」

次狼「アンタはこの世界のキングだ。だから残った方がいい。俺た

ちでケリを付ける。」

と次狼が言う。

太牙「わかった。ではすぐに出発の準備を始めよう。」

渡「わかったよ！兄さん」

こうして渡達の新たな戦いが始まったのだった。

運命の出会いと戦いかいの幕開け！(前書き)

再び修正しました。ではどうぞ

運命の出会いと戦いかいの幕開け！

あれから1時間後、

ここはキャツスルドランの外！いま紅渡が別の世界に向かうために別れの挨拶をしている

渡「よし！さあ、出発だ。」

キバット「よし行こうぜ！」

渡「うん！」

すると次狼が渡に話しかけて来た。

次狼「俺達もついていくぞ！ヤツには因縁がある！」

ラモンとリキも同時にうなづく！

紅渡「わかりました次狼さん達も一緒に行きましょう！」

2人は固く握手する。

太牙「渡、気をつけるよ。ヤツは最悪な罪を犯したファンガイア、いやダークファンガイアだ。」

渡「わかつているよ兄さん。兄さん達も僕達が留守の間この世界を頼みますね。」

太牙はうなづく

名護「渡君、君なら大丈夫だ！頼んだぞ！」この人は名護さん。僕の友人でファンガイアハンターであり僕の一時師匠だった人だ。

恵「しつかりね！渡君！」

この女性は恵さん。名護さんの奥さんでありファンガイアハンターでもある。

渡「はい！では行ってきます。」

こうして紅渡とキバット 次狼 ラモン リキはスイートプリキュアの世界に向けてキャツスルドランで空中に出現したオーラに向かって出発した。

2日後、加音町の上空オーラから出て来たキャスルドランはすぐに透明になり加音町の上空を飛び回り着陸出来る場所を探す。

キャスルドランの中ではラモン達が見ながら話していた。ラモン「ウワア〜綺麗な町だな〜」次狼「ここに美味しいコーヒーがあれば最高だがな！」

次狼がつぶやく。

渡「ちよつと次狼さん！僕達の使命忘れたんですか？」
渡が怒る。

リキ「俺たち遊びに来たんじゃない。仕事だ！」

次狼「わかつている。ただの冗談だ」

と済ました顔で言うので渡は半分呆れていた。

こうしてキャスルドランが空き地を見つけて、着陸し大きな屋敷に姿を変える

キバット「とりあえずまずは、調査だな！」

渡「よし、キバットは僕と来て！次狼さん達は三人バラバラに調査を開始してください。」

次狼「わかった」

ラモン「了解 お兄ちゃん」

リキ「わかった。任せろ」こうして全員はバラバラに調査を始めたかった。

ちよつどその頃、加音町ではとある広場で三人の少女達がピクニックをしていた

響「最近ね〜奇妙な事件多いよね〜しかも遺体すら出て来ないって言うし。ハムツ」サンドイツチを食べながら響が言う。

奏「響やめてよ！そんな話し！でも確かに気になるわね〜ご遺体が出て来ないってどういう事かしら？」奏が紅茶を飲みながら言う「

エレン「もしかしたら悪いヤツがご遺体を隠したんじゃないかしら？あつコレおいしいわ〜」

エレンがドーナツを食べる」

のんびりと三人は日曜日の平和なピクニック楽しんでいた。

だがその時に町のほうから男性の悲鳴が聞こえた！

男性「たつたつ助けてくれ！誰か！ギャア！」

響「今の悲鳴って何？」

奏「まさかネガトーン！」

エレン「ネガトーンの仕業にしては空気が重すぎるわ！何かがおかしい！見て」

エレンが上を指すと突然雲が曇ってきたのだ！

響「とにかくあの人の所に！」

2人はうなずくとすぐにピクニックの物をバスケットにしまい三人は声のした所に走る！

三人「あれは、一体」

先ほど叫んでいた男が牙のような物で突き刺されて死んでおりその場には謎の怪人が立っていた。その姿はネズミに似ていた。

ラット「何だ貴様ら！俺の食事を邪魔でもしに来たのか！」

エレン「やっぱり、コイツはネガトーンじゃないわ！何物なの！」

響「あなた一体その人に何をしたの！答えなさい！」

ラット「答える義理はない！ちょうどいい！貴様らも食ってやる！」と先ほどの牙を出すの間一髪で三人は交わす。

奏「仕方ないわ！みんな変身よ！」

三人はキュアモジューレを取り出す。

三人「人を理由なしに襲う何て！絶対に許さない！

レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！

メロディー「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

ビート「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」届け、3人の組曲！

スイートプリキュア！

三人がポーズを決める！

ラット「プリキュアだと！？そうか貴様らがこの世界の戦士プリキ

ユアか？コレはボスにいい土産が出来たねクウ〜ククク
と笑う。

メロディー「ボス？つて事は親玉つて事！」

リズム「しかも今この世界つて言つたよね。」

ビート「あいつらは土さんと同じく別の世界から来たつて事ね。と
にかくアイツを倒しましょう！」

三人が構え、パンチを繰り出す。

メロディー達「プリキュア・トリプルパンチ！」

だがラットファンガイアは盾を取り出して三人の攻撃をガードする！
ラット「お〜と危ない危ない！残念だつたなプリキュア！」

メロディー「いったあ〜い！アイツ何て卑怯なの」

リズム「こうなつたら！必殺技で一気に！」ビート「わかつたわ！
突然後ろから！」

？「君達は下がつて！後は僕に！キバット！」

キバット「よっしゃ〜キバツていくぜ〜」

全員が後ろを振り向くと、紅渡が立っていた。

ビート「あなたは一体？」

渡「話しは後にして！変身！」

キバット「ガブツ」

渡の顔に何かの模様 が浮かんだ次の瞬間だつた。 渡は一瞬にして
仮面ライダーキバに変身した。

その姿はバンパイアのような鎧をした戦士だつた。

プリキュア達「鎧の仮面ライダー？えっどういう事？」

キバ「僕は仮面ライダーキバだ！」

メロディー「また仮面ライダー」

キバ「？また？」

キバが首を傾げる。

リズム「とにかくアイツを先にやつつけないと！ところで、アイツ
は何て言う怪人なの？」

キバが簡単に説明してくれた。

キバ「アイツはダークファンガイアの手下だ。アイツらは自分の世界で罪を犯した悪のファンガイアなんだ。」

ファンガイアは本来なら、もう人間を襲う事はしては行けないんだけど、奴らは自分達の満足感を満たす為に人間を襲っているんだ。」
ビート「ひどい！そんな事の為に！それなら、私達もいつしよに戦わせてください。」

キバ「いや危険過ぎる！君達も奴にライフエナジーを吸われたらおしまいだ！だからコイツは僕がやる！」

メロディー「でも！」キバ「お願いだ！コイツはまともな奴ではないんだ。だから後ろに下がって！」

プリキユア達は仕方なくキバの後ろに後退する。ラットはイライラした様子でキバに話す

ラット「いつまで待たせる気だ！」

キバ「悪かったね。さあ、戦おうか。キングの名に賭けてお前を罰する！」

キバット「さあもう一度キバツていくぜ！」

三人「ベルトが喋った」

次回に続く

運命の出会いと戦いかいの幕開け！（後書き）

次回はいよいよキバが戦い！ビートが援護します。ではまた！

登場人物キバ編（前書き）

前の設定を少し変えました。

登場人物キバ編

紅渡

仮面ライダーキバの主人公。原作から三年経過した事で精神もさらに強くなり、成長している。

この作品では彼はヴァイオリン職人であり兄の片腕として働いている。

兄の太牙からキングの称号を与えられている為、事実上もう1人のキングである。

その理由は物語の中で明らかになる。

現在は悪事を働くファンガイアを退治する親衛隊のリーダーになっており、ダークファンガイアを追ってこの世界にやってきた

登太牙

原作から三年経過しているが未だにクイーンを見つけておらずそれ故に2年前に渡に自らの称号を分け与えた。

さらに未だに人間を襲うファンガイアを退治する為に渡をリーダーとした親衛隊を作った。

渡にキングの称号を与えた理由は物語の中で明らかになる。

後に渡を援護する為に、プリキュア達のいる世界に行く。

次^{ガル}狼

原作のキバから三年が経過して闇の契約は切れているのだが、本人はキャッスルドランでの生活が気に入っている為、未だに住み続けている。

その代わりに渡達の親衛隊の副リーダーとしての仕事を与えられている。

ラモン（バッシャー）

次狼に同行してきた。理由は同じである
性格は相変わらずである。

リキ（ドツガ）

次狼に同行してきた仲間の1人。
理由は同じである。

相変わらず自分の伝えたい事を言うのはヘタである。

なお上の三人全員が太牙の開発した人工ライフエナジーを使用している為に人はもう襲ってない。

キバットバット三世

原作同様、相変わらず性格も変わってない。渡をキバに変身させる能力を持つ。

タツロット

今回も渡達に同行しているが本人はキャッスルドランの中で熟睡している。

ダークファンガイア

正確には、未だに人間を襲うファンガイアの集団の事、原作が終了してから一年がたった頃に出現した。

彼らは人工ライフエナジーを嫌い未だに、ライフエナジーは人間から得なければ満足出来ないと思っている。

ボスは未だに不明。

登場人物キバ編（後書き）

モモタロス「さあ、次回は俺が出るぜ、楽しみに…」

コハナ「アンタ勝手に入りこまないの！ほらいくよバカモモ！」

モモタロス「いててて！離せコハナクソ 女！」

コハナ「うるさい！バカモモ！」

モモタロス「ぎゃあー！」

うん？モモタロス何やってたんだ？

パープルサウンダーとビートロッカー！(前書き)

いよいよキバが戦います。後ビートも援護の形で戦います。
ではスタートです。

パープルサンダーとビートロック！

キバット「俺か？俺はキバットバット三世だ！よろしくなお嬢ちゃん達！」

キバットが陽気にプリキュア達に話しかける。

メロディー「もう何がなんだかさっぱりわからないわ！ファンガイアに喋るコウモリ何て！」

次の瞬間、盾を持ったラットが襲って来たのでキバは猛攻撃で反撃を始める

キバ「ハア〜！」

キバが格闘技でラットに連続攻撃を仕掛ける。だが相変わらずラットは盾を持っており、全ての攻撃がまるで通用しないのだ。

ラット「そんな攻撃がこの俺に効くかよ！」

キバット「何て堅い盾なんだ！このままだと渡の体力が持たないぞ〜」

キバ「ハアハア〜キバットここはやっぱりあれで行くしかないよ！」

キバは息を荒げながら言った。

キバット「よし！ここは圧倒的なパワーを持つドツガだ！」

キバは腰のベルトから紫色の笛の形をしたアイテム、フェッスルを取り出すとキバットに吹かせる！

キバット「ドツガ・ハンマー！」

すると、音が響き渡り始める

メロディー「何この音？」

リズム「何かを呼んでいる音にも聞こえるわ。」

ビート「二人共あれを見て！何か来るわ！あれは石像かしら？」

2人がビートの指を差す方向を見ると石像みたいな物が飛んできた。キバの目の前で飛んできた石像は生きていたかのように小さな手でゴン！と、音を立て巨大な拳の形をしたハンマーに変形した。次にキバがそのハンマーを両手で握ると両手と両腕に鎖が出現して一

瞬にして紫の装甲が装着され肩の鎧も形がガツシリした形になり胸の鎧は分厚い物に変わりベルトと顔の目が紫色になりキバはドツガの力を借りた姿、キバドツガフォームになったのだ！

メロディー「色が全身紫になったわ！」

リズム「あの石像のせいね。一体どういう事？」

ビート「とにかく様子を見ましょう。」

三人は後ろから構えたまま立っていた。

キバDF「うゝふん！」

キバDFが歩き出すとハンマーが引きずられ火花が出る

次の瞬間キバDFがドツガ・ハンマーを持ち上げ一気に振り下ろしてラットが構えた盾を一撃で粉碎する。

ラット「バカな！一撃だと！」

あまりにもあっさり盾が破壊されたのでラットは焦り始めた。

ビート「何てパワーなの！私たちのパンチが効かなかった盾を一撃で破壊するなんて！」

メロディー & amp; リズム「スゴイ！」

三人は圧倒的なパワーに驚く。

ラット「くっそ〜こうなったらコレで！」

ラットは剣を取り出してキバDFに切りかかる！だが剣は、全く効いておらず、火花を散らすだけだった。

さらにキバDFはハンマーで何度もラット殴りまくり、腑どころにハンマーを入れて、軽々と投げ飛ばす！

その衝撃でラットは壁にぶつかった後、床に倒れる！

ラット「ぐっ、こんなハズでは〜クソ〜」と悔しがる。

リズム「パワーだけじゃなく防御力も凄いわ！多分、あれはパワーと体を強化する姿なのかも！」

メロディー「なるほどね！だから姿が変わったんだ。」メロディーが納得して手をポンとする。

キバット「お嬢ちゃん正解だ！さあトドメいくぜ渡！」

キバDF「うゝむ！」とキバDFが唸る。キバDFがドツガ・ハンマーを横に持ちかえる。

キバット「ドツガ・バイト！」

ドツガ・ハンマーにパワーが送られキバDFが必殺技の体制に入ろうとした正にその時に銃弾がキバDFの背中に当たりキバDFが体制を崩しひざまずく！

キバット「何！誰だ邪魔するのは！」

ラット2「危なかったね兄さん！助けにきたよ！」

何と建物の屋根に隠れていたもう一匹のラットファンガイアが銃で邪魔したのだ

ラット1「助かったぜ弟よ！」

ラット2「どういたしまして兄さん。さあ、食らいなキバ！」

再び銃弾を発射し、キバDFに命中する！

キバDF「ぐおお」

メロディー「えっどうして避けないの！」

リズム「違うわメロディー！避けないじゃないじゃなくて避けられなかったのよ！」

メロディー「えっどうして？」

リズム「多分あの姿はパワーと防御力は高いけど動きがとても遅くなるって事かも！それにさっきゆっくり歩いてたし」

メロディー「そんな！じゃあどうすれば！」

ビート「私が援護をするわ。あの人のままだとやられちゃう！二人共、私をあの屋根に上げるのを手伝って！」キバDFは受けたダメージが大きいのかまだひざまずいていた。

メロディーとリズムはすぐに両腕で踏みだいを作りビートに合図を送る！

2人「ビート今よ！」

ビート「ハア〜！」

ビートは高くジャンプしラット2がいる
屋根に到着する。

ラット2「なっ何〜！」

ビート「コレ以上邪魔はさせないわ！」

ラット2「生意気な小娘め！コレでも食らえ！」

ラット2が銃をビートに向けて放つ！

メロディー & amp ;リズム「ビート危ない！」

ビート「ラブギターロッド！ ビートバリア！」

ビートがビートバリアを張り銃弾を防ぐ！

ラット2「何〜！」

ビート「次はコレよ！ビートソニック！」

音符の形をした無数の矢が一生にラット2に命中する！

ラット2「ぎゃあ〜」ラット2はそのまま倒れる。

ビート「今よキバ！」

キバDFは立ち上がりハンマーをもう一度構える。

キバット「よっしや〜もう一度！ドツガ・バイト〜！」

再び必殺技の体制に入り、周りが夜になる！

メロディー「えっもう夜なの？」

次にキバDFがハンマーの持ち手を地面に下ろし手の形をしたハン

マーをラットに向ける。

ラット1「なんだあれは？」

キバDFが手の後ろの部分を引きと指が開き中から巨大な目が出て

きたのだ。

すると衝撃波が出てきてラット1は一瞬にしてガラスのような姿に
なる！

リズム「あのファンガイア、ガラスみたいになっただわ！」

次にキバDFは紫の稲妻が発生したハンマーを振り回し始めるそれ
と同じ形の巨大な拳が発生する！

ビート「何て大きい拳なの！」

同じ動きをした拳をキバDFはそれをファンガイアに振り下ろし粉

砕する。

キバDF「ドワァ〜」

キバット「よっしゃ〜コレで一丁上がりだな！」

突然辺りが明るくなり周りが夜では無くなる。

メロディー「元に戻った〜何で？あれ？あの光何だろう？

その後、光の玉が出現し雲の中に消え去って行った。

実は雲中に透明になったキャツスルドランが隠れていて、ドランが食べたのだった。

キバDFはキバットが離れて元の渡に戻りドツガ・ハンマーもドツガに戻りズシン！と地面に立つ！

渡「ありがとうリキ、助かったよ！」

ドツガ「お安いごようだ…渡！」

メロディー「石像が喋った〜」

ドツガ「俺は石像ではない…渡の友達、リキだ。」
と喋る。

メロディー&リズム「石像じゃないの！」

渡「彼は僕の友達のリキだよ。ファンガイアとはまた違った種族なんだ。」

と渡が説明を始めていると、上から

ラット2「う〜チクシヨウ！お前ら覚えてるよ〜」

もう一匹のラットは素早く逃げる！

ビート「待ちなさい！もう何て足が速いのよ！」

ビートは仕方なくみんなのいる場所に飛び降りる。

メロディー「さあ、コレで全員揃ったし何から話そっか？」

リズム「とりあえず私達も変身を解きましょう。ね？」

ビート「了解」

三人は変身を解消して元に戻る。

渡は改めて自己紹介をする。

渡「皆さん始めまして、僕は紅渡です。よろしくお願いします。後、皆さんさつきはありがとうございます。」

と頭を下げて挨拶とお礼をする。

エレン「いえいえ、あれは助けたい一心でやっただけですから、そんなに頭下げないで〜」

エレンが必死に渡に話しかける。

キバット「おいおい渡、頭下げ過ぎだ〜！俺はさっき自己紹介したから分かるよなお嬢ちゃん達？」とキバットが言うので三人は頷く。隣にいたドツガはふん！と言うと人間の姿に戻る。

リキ「初めまして、リキです。よろしく…お願いします。」
なんとかりキも自己紹介する。

響はアハハつと気まずくごまかし笑いをする。

響「さてと、次は私達の番ね。あたしは北条 響です。よろしくね。
奏「南野 奏です。先ほどはありがとうございます。」

エレン「黒川 エレンです。好きな食べ物は〜…」

響& a m p ;奏「だから〜エレン〜自己紹介は名前だけでいいの〜！」と二人は見事にツツコム。

キバット「おっ見事なツツコミだな。」

とキバットが感心する。

渡は次に場所を移したいと話す。

渡「それじゃあ響ちゃん、奏ちゃん、エレンちゃん、場所を変えて話しましょう。ここでは他の人がいずれ来るかもしれないので、」

響「オツケ〜それでどこに行きましょうか渡さん？」

渡「僕の家はどうでしょうか？あそこなら仲間達がいるし。」

響達はしばらく相談した後、返事をした。

奏「わかりました。それじゃあ渡さんのお家に行きましょう。」

こうして全員渡の物件、キャッスルドラムに向かうのであった。

続く。

パールサンダーとビートロッカー！（後書き）

今回はキャッスルドランの中での話し合いがテーマです。
では次回も！

キバット「キバっていくぜ！」

キヤッスルドランでの会話とボスの正体！（前書き）

一部を修正しました。ではどうぞ

キャットスルドランでの会話とボスの正体！

数分後、渡と響達は立派な屋敷の前に立っていた。

響たち「スツゴいこれ本当に渡さんのお家何ですか？」

響たちは驚きながら聞く

渡「うん、そうだよ。さあ、中にどうぞ。」

渡が扉を開けながら話す。扉は古い為かギョーとなる。

しばらくは廊下が続く為に響達は会話をする。

響「なんか随分古い屋敷ね。あちこちに蜘蛛の巣あるし。」

奏「うん、それに確かこっつて空き地だったはずよね。」

と渡が話しかけて来る。

渡「実はこの屋敷は生きているんだよ。」

と真面目な顔で言う渡。

エレン「えっ生きている？この屋敷が？」

響「ウソだよ！そんな訳ないよね渡さん？」渡「ウソではないよ。」

後で証拠を見せるから、さあ付いたよ！」渡が次の扉を開けるとそ

この部屋は大広間だったのだ。

響達は思わず啞然とする。

響「こんなに中は広いんだ！あれ誰がいる？」

中には調査を終えた次狼とラモンが休憩をしていた。

次狼「遅かったな渡。こっちは調査を終えて…うん？客人か？」

次狼は椅子に座りコーヒーカップを持ったまま聞く。

続いてラモンも

ラモン「お帰りお兄ちゃん！あれ？その子達は誰なの？」

渡は先ほどの戦いの事と彼女達について説明を始める。

渡「彼女達は僕がダークファンガイアとの戦いの中で知りあった戦

士達だよ。え〜と名前は？」

響「プリキュアです。」そこから、響はプリキュアについて説明する。

響「あたしたちは、メイジャーランドの幸せの楽譜を完成させて、マイナーランドが不幸の楽譜を完成させない為に音符を集めながら戦っているの、そしてこれを使ってプリキュアに変身して戦うの」と言いキュアモジューレとフェアリートーン達を見せてた。

渡「なるほどね。君達も美しい音楽を守る為に戦っているんだね。すごいよ！」

キバット「まだ中学生なのにスゲ〜な！」

二人が響達を誉める。

奏「ううん、私達は大好きな町の為に戦っているだけですから！」

キバット「いやいや普通の女の子にはできね〜ぜ。こんな事！」三人はにっこり笑いながら照れる！

じばらくして、キバットがキュアモジューレを見つめていると、あの事に気付く！

キバット「うん？これオカリナにも似ているな？」

奏「実はこんな事もできるわ。おいでレリー」

レリー「レレ」

次にキュアモジューレにフェアリートーンを装置し奏がキュアモジューレを吹き音を出す。

するとキバットが

キバット「ほう〜そんな事も出来るのか！うん？急に元気が出てきたぞー！」

奏「この子の力は私や周りの人を元気にする力があるの。」

キバット「スゲ〜なんだかコレ、俺達のフェッスルに近いな。」

とキバットが感心する。

レリー「僕達が近いつてどういう事レレ？」

キバット「お前！しゃべれるのか！」キバットと渡達は驚く！

レリー「まあね〜レレ」

キバット「コイツはたまげたな〜」

と驚くキバツト達

奏「ねえキバツト、さっきこれがフェッスルに近いつて言ったけど、
どういう事なの？それにフェッスルって何？」

奏は疑問に思つた事をキバツトに聞く。

キバツト「ああ、フェッスルは、そこに居る三人を呼び出してキバ
に力を与える為の道具なんだ。よし！今からお礼に見せてやるぜ！
と何処からか？全てのフェッスルを取り出して響達に見せるために
机の上に置く。

響「色々な形があるのね」

奏「ガラスみたいで綺麗ね、あれ？1つだけ金と赤色だわ！」

キバツト「それだけは特別なんだぜ！」

奏「ふん、何が特別なの？」

キバツト「まだ秘密だ。また今度見せてやるからな」

とキバツトが言う

エレン「ねえ？1つ吹いてみていい？」とガルルフエッスルを持っ
てキバツトに聞く。

キバツト「ウーン、悪いがお嬢ちゃん達は辞めておいた方が…おい
おい！お嬢ちゃん！」なんとエレンは話しを途中までしか聞いてな
かったのでガルルフエッスルを吹いてしまったのだ。だがもちろん、
何の音も出ない。

エレン「あれ？音が出ない？」

キバツト「それは、俺だけが吹ける道具なんだって言おうとしたん
だがお嬢ちゃんが話しを聴かないから」

エレン「ごめんなさい キュアマジョーレみたいに吹けると思った
の」

エレンはニコニコしながら誤る。

キバツト「待つたく勘弁してくれよ。これはオモチャじゃないんだ
からな！」

とキバットが呆れながらフェツスルをしまつ。

次狼「そうだ、それは俺達を戦いで呼ぶ時に使うんだ！お遊びで使うのは、辞めてくれ！」

おつと自己紹介が遅れちまったな！俺は次狼だ。よろしくなお嬢ちゃん達？」と手を出してきたので、響達は握手する。

ラモン「僕はラモンだよ！よろしくね。」少年が挨拶をしてくる。響達は再度名前を教える。

奏「あなたは渡さんの弟なの？」と奏が聞く。

ラモン「全然違うよ！だって僕はこの人より年上だし」

奏「えっあなた私達より年上なの？」

ラモン「うんまあね〜あっせつかくだから、僕達の本当の姿みせてあげるよ」

と次狼とラモンが変身始める

響「えっ変身するの？」

次狼は床を引つかくと「アオーン」と吠え青い人狼ガルルに変身する。

響「狼男だったの！？」

ガルル「俺はウルフェン族の誇り高き戦士のガルルだ！」

次にラモンが変身始める。

ラモンは一瞬「バツシャン」と水の音がした後緑色の魚人みたいな姿になる

バツシャー「マーメン族のバツシャーさ！」

奏「人魚って事？」

バツシャー「違うよ僕は魚人だよ！」

奏「ふ〜ん、違うんだ！」

ついでにリキも身体から紫の雷を出して変身する！

リキ「うお〜」

エレン「あなたさっき変身していたのに…」ドツガ「俺…フランケン族のドツガ！よろしく」。

渡「彼らは最後の生き残りで、今は僕達の協力者なんだ。」エレン
「最後までてどういう事？仲間はどうしたの？」ガルル「俺達の種族
はファンガイアによって滅ぼされたんだ。そして俺達が最後の生き
残りだ。」

エレン「そうだったんだ。ごめんなさい嫌な事思い出させて」

エレンが落ち込んだので珍しくガルルが優しく話しかける

ガルル「お嬢ちゃん気にするな！俺達がいる限り一族は滅びた訳じ
やねえんだ。だからお前が落ち込む必要はねえよ！なっ？」

とエレンの頭をなでる。

キバット「お前にしては珍しいな！つて言うかいい加減に人間体に
戻れ！怖すぎるだろ！その姿は！」と怒鳴るのでガルル達は人間体
に戻る。

渡「さて、今度は僕達がなぜこの世界に…」

突然響が

響「ちよつと待った　　先にキバの事についてお願いします。」
と言ってきたのだ。

キバット「しょうがね～な！いいかキバつて言うのは！」

つとキバットがこれまでの事とキバの事を全て説明をしてくれる。

数分後、

響「ふ～んキバつて元々ファンガイアの王の為に作らせた鎧だった
んだ。」

奏「その鎧は渡さんのお母さんから譲り受けた物で、今は罪を犯し
たファンガイアを退治する為に使っているんだね。」

キバット「まあな、そう言う訳だ。！渡待たせて済まないな！」

渡「大丈夫だよキバット、説明ありがとう。助かったよ。さて、僕
達の目的はあるファンガイアを退治する為にこの世界に来たんだ。

ソイツの名前はスネークファンガイアだ！」

奏「一体何をしたの？」

渡「アイツは、自分たちのやり方に批判した人間や一般のファンガ
イアを勝手に処刑したり、殺人をした事がヤツの罪だ。だからもう

1人のキングになる僕としては、彼を絶対に倒さないといけないんだ。」

次狼「しかもソイツは俺達の一族を陥れた張本人だ。」
と付け加える。

響「ひどい！自分たちのやり方を他人に押し付けて殺人までするなんて！絶対にソイツ許せない！」響は怒る。

奏「私も同感！渡さん私達にも協力させてください！お願いします。」

「
エレン「私も！！」

渡「ありがとう。じゃあこの世界にいる間一緒に戦おうね。」

三人「ありがとうございます。渡さん！」

キバット「まあ、確かにお嬢ちゃん達の力はすごかったしな！これからもよろしく頼むぜ！」

するとエレンが

エレン「ねえ渡さん最後に気になったいる事があるんだけど
とエレンが言う。

渡「何が気になるのエレンちゃん？ファンガイアの事？」

エレンは首を振る

エレン「違うわ、さっき自分の事をキングって言ったじゃない？ど
ういう意味かって？」

エレンが真剣に聞いてくるので、渡は

渡「わかった話すよ。僕がもう1人のキングになる訳をね」「こうして、渡はキングになる訳を話し始めた。

渡「あれは、ちょうど二年前の事だよ」

次回に続く！

渡が再びキングになった理由！（前書き）

お待たせしました。いよいよ渡が再びキングになる理由が明かされます。
ではスタートです。

渡が再びキングになった理由！

渡「あれは今から二年前に起きた出来事だよ。」
渡が話し出す

渡と仲間達はネオファンガイアとの戦いを終えそれぞれの新しい生活を始めており、母親の真夜は世界中の音楽を楽しむ為に旅にでた。その日、渡は自宅にいて、いつもの用に仕事をした後、ブラッディ・ローズを超えるヴァイオリンを制作していたのだ。

渡「ウーン？形はだいぶ良くなったけど、色がもう少し薄いかな？でもココがこうなるから…」

と色々悩んでいた時にブラッディ・ローズが久しぶりに音を立て始めたのだった。

渡「え！？ブラッディ・ローズが？一体どうしたんだろう？」

キバット「なっなんだ！アイテ！」キバットは気持ち良く昼寝をしていたので慌てて起きた標識にヴァイオリン型の巣箱の中でぶつかってしまう。

渡「何か嫌な予感がする。移こう、キバット！」

キバット「ああ、そうだな！早く行こうぜ渡。」

渡はすぐにヘルメットをかぶり、マシンキバーに乗る。

渡が運転しながらキバットに突然こんな事を言う。

渡「ねえキバット？さつき昼寝していた時に寝言を言ってたよね。

確か「ああ！いいね！最高だぜ！ねえちゃん」って！

キバット「！俺そんな事言ったのか！」

渡が頷く

キバット「いや！実は夢の中でスゲ！美人さんがいてよ！しかもそのねえちゃんの首が凄く噛みやすいから気持ち良くてよ！だからつい言ってしまったんだ！」

渡は目が点になりながら呆れた。

渡「聞かなかつた事にしよう。」

キバット「おい！」

こんな会話をしてから数分後ブラッディーローズが知らせた場所に到着してマシンキバーから降りて辺り見回す。

すると突然、男性が何かから必死で逃げており逃げてきた先では、フロッグファンガイアとスネークファンガイアが戦っていた。

男性「たっ助けてくれ〜」

渡「落ち着いてください一体何が？」

男性は恐怖に震えながら話した。

男性「あつあつちの蛇みたいなヤツがきつ急に俺と友達をおつ襲つて来たんだ。」

キバット「もしかしてあのカエルみたいなヤツか？とりあえず落ち着け！ガブ！」キバットに噛まれた男性はようやく落ち着く。

男性「ありがとうキバットさん。」

キバット「そんな事より何で喧嘩しているんだアイツら？」

男性は首を振りながら言う。

男性「違います。蛇のファンガイアがいきなり俺達を襲つて来たんです。だから俺の友達を俺を守る為に戦つて！危ない！陽太〜避けろ！」

なんとフロッグファンガイアの陽太はスネークファンガイアに体を剣で貫かれたのだ。

陽太「ぐはっ！俺が一体何をしたって言うんだ！グッグワア〜」

はガラスの用に砕け散ってしまった！

スネーク「処刑完了だ！」

男性「陽太〜！そんな！ウソだ〜」つとその場で叫びそのまま気絶する。

キバット「おい！兄ちゃんしつかりしろ！」

渡「駄目だ！完全に気を失っている。くっ！そのファンガイア！なぜこんな酷い事をするんだ。」

渡は怒りの表情をしながら、スネークファンガイアを睨みつける！

スネーク「我が輩は裏切り物を処刑しただけだ！」

と平然とした態度で言う！

キバット「なんだと！お前！自分がキングになったつもりか！」

キバットが怒る！

スネーク「その通りだ。我が輩が太牙を倒し新たなるキングになる男だ！」

渡「新しいキングになる？兄さんを倒す？ふざけるな！」渡が凄まじい怒りで怒鳴る！

するとそこに白いバイクに乗った太牙とキバットバット二世がやってくる

渡「兄さん！」

太牙「さっきの話は全て聞かせてもらった。実に、聞き捨て鳴らんな！一体何故罪もないファンガイアを殺した？答え次第ではタダでは済まないぞ！」

スネークはあざ笑いながら言った。

スネーク「良からう理由を教えてやる。その死んだ屑のファンガイアは人間と仲良くしすぎていた。それだけだ。」

太牙「それだけだと！今はファンガイアと人間が共存しあって生きて行く時代にしたハズだ！何に不満がある！」

スネーク「我々ファンガイアが人間と共存などしてはならんのだ！愚かなキングよ！」

太牙「愚か者は貴様だ！そんな古い理由で！渡行くぞ！コイツには、僕達兄弟が判決する！死だ！キバット！」

キバット？「おう！カブリ！」

変身音がなり待機する。

渡「わかったよ！兄さん！いくよ！キバット！」

キバット「よっしゃ！キバって行くぜ！ガブ！」

渡「変身！」

2人は同時に変身する！

渡はキバフォームになり太牙はダークキバになって2人同時にスネ

ークに戦いを挑む。

スネーク「ふん！少し遊んでやるか！はあ」

手から衝撃波を出して2人に攻撃する！

2人「うわあ」

2人はひざまずく！

Dキバ「くつ何て奴だ！キングに匹敵する力を出せる何て！」

キバ「兄さん！今度は挟み撃ちで行こう！」

Dキバ「ああ！」

キバット「よっしゃ！ココはタツちゃん出番だぜ！」

キバットが金と赤のフェッスルを吹きタツロットを呼ぶ！

タツロット「ぶゆるんぶゆるんぶゆるん！お待たせしました。テン

ションフォルテツシモ 行きますよ！変身！」

キバは本来の姿エンペラーフォームに変身する！」

キバEF「ザンバット！」

タツロットからザンバットソードを引き抜きザンバットの牙で研ぎ

そしてスネークに切りかかる！

スネーク「ふん！良かろう！」

キバEFとスネークは互いに剣を巧みに動かし戦う！

スネーク「ム！やるな黄金のキバ！」

キバEF「兄さん今だ！」

Dキバ「はあ！」ジャコーダーロッドでスネークに上から不意打

ちをかける。だが！

スネーク「バカめ！この時を待っていたぞ！」

なんと背中から複数の蛇がDキバを襲いさらにジャコーダーを奪い

取る！

Dキバ「しまった！！ぐわあ」

Dキバが弾き飛ばされて地面に転がる！

キバEF「兄さん！」

スネーク「ふん！食らえ！」

キバEF「うわあ」

キバEFも倒される。

スネークはジャコーダーを見ながら言う

スネーク「これは元々我が一族が使う為にある物だ。確かに返して
もらうぞ」

Dキバ「バカな、それはキングの為に造られた物だ！返せ！

」

スネーク「誰が返すものか！我が輩が今から新しいキングなのだ！
今からココに宣言する！ファンガイアとしての誇りを持つ物よ！我
が輩の元へ集まれ！

我が輩に味方した物は今日からダークファンガイアの仲間だ！ハッ
ハハハッハハ」

と突然姿を消す！Dキバ「くそ逃がしたか！」

キバEF「兄さんごめん僕がもつと…」

Dキバ「いや違う渡 今回は僕達の敗北だ。」

とDキバは変身を解除する。

キバEFも同じく変身を解除して2人は歩いて近くの公園に移動す
る。

太牙「渡、今回の出来事はかなり厄介な事になるかもしれない。」

渡「うん。そうだね兄さんコレからどうするの？」

太牙「ダークファンガイアの野望を阻止するために親衛隊を作る事
にする。渡、お前がリーダーを務めてくれ！」

渡「わかったよ兄さん。今回の事件はなんとしても止めないと！」

太牙「それともう一つあるんだ渡。お前にもキングになって欲しい
んだ！」

あまりの突然の事に驚く渡！

渡「どうして？兄さんが一番キングにふさわしいと言うのに、それ
に僕は辞退したんだよ！」

太牙「わかっている、だが今のままでは全てのダークファンガイア
の悪事を僕1人では裁き切れない。人間とファンガイアの共存をす
るために、今はキングも2人必要なんだ！」

渡「つまり僕に今回の件が終わるまでの間キングになって欲しいって事？」

太牙「ああ！その通りだ。」

渡「わかったよ、兄さん引き受けるよ！」

キバット「おい渡！いいのか本当に？」

渡「一時的になるだけだし、兄さんを助ける為だ。だからやらせてキバット！」

と真剣な顔をする渡。

キバット「わかったぜ渡！好きにしな！」

渡「ありがとうキバット。」

太牙はもう一つ別の事を考えていた。

太牙「ヤツはジャコーダーを自分の一族の物だと言っていたどういう意味があるんだ……」

こうして苦い敗北を味わった渡と太牙はこの二年の間に次々とダークファンガイアを処刑して、ヤツを追い詰めたが再び後一步で逃がしてしまうのだった。

渡「以上が僕が何故キングになったかの理由です。」

渡が話し終わる。

しばらくして響が、

響「渡さんも色々あったんですね。しかもヴァイオリン職人だったなんて！驚いたよ。」

渡「うん、まあね。でもまだまだだよ、父さんと母さんが作ったブラッディ・ローズを超える自分の作品はまだ作れてないんだけどね。」

3人「ブラッディ・ローズ？」

渡「そのヴァイオリンの名前だよ。父さんがつけたんだ。」

奏「ご両親が作った

ヴァイオリンなんてすごい！見せてもらっていいですか？」

渡「うん、いいよ！ちよつと待つてて！」

渡がイスから立ち上がり暖炉の側に置いていた大切なケースを持ち上げて響達の元に戻つて来てケースを開ける。3人はブラッディ・ローズを観て目を輝かせる

響「うわあゝママのヴァイオリンよりも素敵！」

渡「響ちゃんのお母さんもヴァイオリンの演奏者なの？」

響「うん！あたしのママは世界的なヴァイオリストなの！今は次の公演があるからパリにいるんだけどね。」

渡「うわあゝそれはすごいよ！一度会つてみたかつたなゝ」

渡が顔を輝やせて言う

奏「それなら響のパパに会つてみて！響のパパは私立アリア学園中学の音楽の先生で天才音楽家だから」

渡「すごい！よし！後で響ちゃんの家に行つていいかな？」

響「うゝん別にいいけど、パパお家にいるかなゝ？確か今日は学校で特別練習しに行くつて言つてたようなゝ」と曖昧な事を言う響。

渡「じゃあ、お父さんの都合がいい日にまた行く事にしよう。それでいいかな？」

響「わかつたわ！帰つたらパパに聞いてみるね」

一方のエレンはブラッディ・ローズに夢中だった。

エレン「綺麗！こんなヴァイオリン初めてみたわ！」

渡は誇らしげに話す！

渡「良かつたら一曲演奏するよ。」

渡が持つてきたブラッディ・ローズをケースの中から出した途端に音を鳴らし始めたのだ！

響「えつ？ヴァイオリンが勝手に音を出している？」

渡「このブラッディ・ローズには父さんの願いが込められているんだ。そして何故かはわからないけど、ファンガイアが現れると音を出すんだよ！しかもいつもより音が大きい！まさかスネークか！」

奏「とにかく町に行ってみましょう。何かわかるはず！」

次狼「よし！キャツスルドランを飛ばして移動するぞ！お嬢さん達すぐにイスに座れ！」

響達は分けがわからないままイスに座る。

キバット「よし、キャツスルドラン出発だ！」

キバットがフエツスルを取り出して、吹き始める。

次の瞬間に床が揺れ始める。

響「えっ床が揺れてる！わっわっわっ！」

キャツスルドランが擬態した姿から元の姿に戻り翼を動かして空を飛び始める！

響達「うそ〜空を飛び始めた〜！」

驚愕し始めた3人

渡「だから言ったでしょう？この城は生きているって」響達「本当だったんだ〜びっくりした〜」

キバット「さあ、現場に出発だ〜」

次に続く

渡が再びキングになった理由！（後書き）

次回はキバ対サガです。お楽しみに！

グリーンウォーターと珍敵サバトネガトーン？(前書き)

タイトル変更です。内容は変えてません。

グリーンウォーターと珍敵サバトネガトーン？

キャッスルドランが飛んでから数分後、ブラッディ・ローズが示した場所の近くに着陸する。

そして全員がキャッスルドランから出て現場に到着して、驚愕する。なんと先ほど倒したラットファンガイアが何十匹もいたのだ！

響「うそ〜！何でさっき倒した奴がこんなに増えているの〜！」
響があまりの数に驚く！

キバット「ラットファンガイアはファンガイアの中でも数が一番多いんだ！しかもこんなに沢山あのオーラから援軍連れてきやがって！」

先ほどのラット2が先頭に立っておりこう言う！

ラット2「お前ら全員キバとプリキュア共を殺せ〜！」

ラット達「お〜兄貴の仇だ〜」

奏「うそ〜コレ全部あのファンガイアの兄弟なの〜」

ラット達「ちが〜う我々は兄貴とは心の兄弟だ〜」

エレン「何ソレ？なんか凄く暑苦しいだけ〜…」

キバット「確かに暑苦しい連中だな。」

ラット達「暑苦しいって言うな〜！」

とラット達が怒鳴る！

渡「とにかく全部やつつけよう！キバット！」

キバット「よっしゃ〜キバって行くぜ！ガブツ！」

渡「変身！」

渡はキバに変身し次狼達も変身する！

ガルル「雑魚共が！さっさと片付けてやる〜！」

バツシャー「こんな弱い奴ら楽勝だよねりキ」

ドツガ「ああ！楽勝だ！」

と4人はラット達に攻撃を開始する

キバ「はあ〜！」

ガルル「コイツめ！てえい！」

バツシャー「えい！当たれ！ヤア〜！」

ドツガ「ふん！」

4人はラットを次々に倒していく！

響達「私たちも！」キュアモジューレを取り出して変身する

レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！

メロディー「爪弾くは荒ぶる！もう！今は邪魔しないでよ！」ラットが名乗り上げをしているメロディーの邪魔をして来たのでパンチで追い払う！

リズム「もうこれじゃあ名乗りも出来ない！邪魔よ！どいて！」

リズムがキックをラットに決める！

ビート「もうあっちに行つてよ！邪魔だから！えい！」

回し蹴りでラットを蹴り飛ばす！

メロディー「もう！怒ったわよ！さあアンタ達かかってきなさい！ここで決めなきゃ女がすたる！はあ〜！」とメロディーが口癖を言つてラット達をまとめてキックで蹴り倒す！

ラット達「すみませんでした〜」

リズム「私の気合のレシピみせてあげるわ！

え〜い！」アッパーパンチでラット達をまとめてぶっ飛ばす！

ラット達「ア〜レ〜」

エレン「私たちの心のビートはもう止められないわ！ラブギター
ロッド！ビートソニック！いつけ〜！」

ビートがビートソニックでメロディー達が吹き飛ばしたラット達に
向かって攻撃を加え全て倒す！

ラット達「ぎゃああ〜」

キバット「おっ恐るべし！お嬢ちゃん達！やっぱり女はこえ〜な
母ちゃんが怒った時と同じ位に怖いぜ〜」

キバットがつぶやく。

メロディー「キバットなんか言つた〜！」

メロディーが怒った顔で聞く！

キバット「何でもない！」なんとか、ごまかすキバット。

キバ「まだ数が多いな。ここはブロンブースターで行こうキバット！」

キバット「よっしゃ〜ブロンブースター！」

ブロンフェツスルでブロンブースターを呼び出してキバが乗る！

メロディー「何あれ？大きな石像ね」

リズム「違うわ！あれきつとバイクの強化パーツよ。」

ビート「何か色々変わっていてオモシロ〜イ」

3人はブロンブースターを見て驚いた。

キバット「さあ渡ここはバシツとやるうぜ！」

キバは頷くとブロンブースターのパワーを全開にして、半分以上のラット達を蹴散らしながら倒す！

それから数分後、やっと全員が最後のラット2の所へたどり着いた。

キバ「追い詰めたぞ！さあ観念するんだ！」ラット2「バカめ！見事に我々の作戦に引っかけたな〜！クツクツク！」

メロディー「えっ作戦？どういう事よ？」

ラット2「マイナートリオさんよ！アンタ達の出番だ。」

リズム「まさか！マイナードランドと手を組んだの！」

マイナートリオ「その通りだプリキュア共そして仮面ライダーキバ！」

キバット「こら〜名前間違っているぞ！正しくは、仮面ライダーキバだ！」

とキバットが怒鳴る！

マイナートリオ「細かい事は気にするな！」

ここからバストドラだけが話し始める

バストドラ「俺様達はメフィスト様の命令でダークファンガイアと手を結んだのだ。ワツハハハ〜！さて、全員覚悟しろ！今から最強のネガトーンを作つてやる！」キバット「はい？最強のネガトーンだ？訳がわからないな〜」

バストドラ「うるさい！ファンガイアよ！行くぞ！いでよ！ネガトーン！」

ラット2「ファンガイアのライフエネルギーよ1つになれ！」

音符と倒した全ファンガイアのライフエネルギーが合体して巨大な合体怪物？サバトネガトーンが誕生する！

サバネ「ネガトーン」

キバット「なっ何なんだコレ！サバトか！」

ビート「ネガトーン？、いつもより大きいわ！」

バストドラ「はっははは！コレぞ最強のネガトーン！サバトネガトーンだ！」

ガルル「なるほどな、2つの力を1つにして新しい敵を生み出したのか！ちっ厄介な奴を作ったな。」

バストドラ「これで不幸の楽譜もすぐに完成し貴様ら全員を倒せるはずだ！そしてメフィスト様に……」

ラット2「ご苦労だった。お前らは消え失せろ！」

なんと突然ラット2が銃をマイナートリオに突き付けたのだ！

バストドラ「一体何の真似だ！我々に協力すると言ったハズなのに！」

するとラットの姿がスネークファンガイアと瓜二つの姿になる！

スネーク2「マイナートリオとの協力はこれでおしまい！兄さんは用が済んだら吹き飛ばす用について」

キバ「アイツは！」

キバット「まさか変装していたのか！」

ヴェノイド「俺の名はヴェノイド！ダークファンガイアの銃使いさ！」そして引き金を引く！

ヴェノイド「んじゃね〜！マイナートリオさん」

ズドーンとマイナートリオを吹き飛ばす！

マイナートリオ「覚えてるよ〜ダークファンガイア共〜！」

メロディー「マイナートリオを一発で！敵だけど何かすごいわね」
メロディーが感心する

リズム「メロディー感心しないの！来るわよ！」

2人はサバトネガトーンの攻撃をかわす。

ヴェノイド「まあ、今回はサバトネガトーンを作る作戦だったし！
これで次の作戦に行けるね

そうだ！ついでに面白い事をしよう！サガーク！」

サガークがどこから飛んで来て腰に巻き付く！

サガーク「……全」サガークが古代語で話す！

キバ「あれは兄さんの！ 何故アイツが！」

ヴェノイド「変身！」ヴェノイドはサガークにジャコーダーを差し
てサガに変身する！同時に白い銃サガークガンも出現する！

メロディー「うそ〜！アイツ！渡さんと同じ仮面ライダーに変身し
たわ！」

メロディーは驚く！

サガ「キバと一緒にしてもらうのは困るね〜僕は仮面ライダーサガ
さ！」

キバ「何故お前がサガの鎧…いや、兄さんの鎧を！」

サガ「僕の兄さんが使えって言っただけで貸してくれたのさ！さあキバ！
勝負だ！」

銃を突き付けてキバに挑発するサガ！

キバ「わかった！必ずサガは返してもらおうよ！」

キバはバツシャーフェッスルをキバットに吹かせる。

キバット「バツシャーマグナム！」

バツシャー「よし！お兄ちゃん行くよ！ソレ」バツシャーはバツシ
ヤーマグナムに変身してキバの手に収まり右側に緑色の装甲が装備
され肩の形がヒレのような物になり、鎧の一部が赤から緑色の物に
置き換わり、キバットの目と仮面の目が緑色になりキバ バツシャ
ーフォームになる！

キバBF「いくぞ！ハア！」バツシャーマグナムから水の弾丸が発

射される。サガも同じくサガークガンを連射して対抗する。

キバBF「くっ」

サガ「オラオラ！どうした！キバ！

2人が必死の撃ち合いを始めた頃残りのメンバーはサバトネガトーンと戦い始めたのだが相手が大きい為全員苦戦していた！

メロディーとリズムはハーモニー・ショットでビートはビートビート・ソニック攻撃を試す。

メロディー&リズム「プリキュア・ハーモニー・ショット
！」

ビート「ビート・ソニック！」

サバトネガトーンに命中するがイマイチダメージが無い！

サバト「ネガトーン！」

リズム「だめだわ！やっぱり急所に当てないと！」

メロディー「それならベルティエで！リズムは私とスーパーカルテットを！ビートはそのまま私たちに合わせて！」

ビート「わかったわ！」

まずはメロディー達が必殺技の体制に入る！

メロディー「奏でましょう奇跡のメロディー！ミラクルベルティエ
！おいで！ドリー！ミリー！」

リズム「刻みましょう大いなるリズム！ファンタスティックベルティエ
イエ！おいで！レリー！ファリー

ビート「おいで！ソリー！」

3人はフェアリートーンをセットしてメロディー達は互いにベルティエを交換する！

3人「駆け巡れ、トーンのリング！」

掛け声と共に2人はクロスロッドを振った後、お互いの手を繋ぎ

2人「プリキュア！ミュージッククロンド！スーパーカルテット！」
ビート「プリキュア・ハートフルビートロック！」

3人の必殺技が急所に命中して3人が決める！

3人「三拍子！ 1・2・3！せいの！ファイナーレ！」

大爆発が起こりサバトと音符が分離する！

ハミィ「ニヤップ〜ニヤップ〜」

どこからもなくハミィが現れて音符を浄化する！

3人「ハミィ〜どうしてここに？」

ハミィ「すぐその公園でひなたぼっこしていたのニヤ〜 そうし

たら町の方で騒ぎがあつたから来てみたのニヤ〜」

キバツト「なんだと！？今度は猫が喋つた〜」

キバ「キバツトよそ見しないで！ぐっ」

互いに弾丸が肩をかすめる！

サガ「アイテ！ちつ時間だ！そろそろかな？」

突然サガは床にサガークガンで砂煙を作り消える！

キバ「くっ逃がしたか！！」

キバツト「あつちの援軍をするぞ渡！」

キバ「うん！キヤツスルドランを呼ばないと！」

一方のサバトはまだ倒されていなかった。

サバト「ぐおお〜」

メロディー「うそ〜まだ倒せて無いの！」

メロディー達は相手を見ながら困つた表情をする！

リズム「ねえ！ガルルさん何か倒す方法知らないの？」

ガルル「ちよつと待つてる！渡がキヤツスルドランが動かすハズだ

！」

ビート「キヤツスルドランを？」

ガルル「見ればわかる！」

するとキバBFが呼んだキヤツスルドランがシュードランと合体し

た状態で現れてキバBFが屋根に飛び乗る！

キバツト「一気に決めるぜ！バツシャーバイト！」

キバツトがバツシャーマグナムにパワーを送る！そして、屋根の上

でキバBFの周りでアクアフィールドが発生した！

メロディー「えっ水が発生した！どうして！」

ガルル「バツシャーフォームは水が無い場所で戦う時、人工的に水

のフィールドを作る事が出来るんだ。

それにバツシャーマグナムの必殺技には水が必要だからな！まあ、屋根の上は初めてだが…」

リズム「なるほどね」

ビート「水の銃使いつて事ね」

次に発生したアクアフィールドを巻き上げた後！バツシャーマグナムを構えてアクアトルネードを発射する！それに合わせてキャッスルドランもミサイルや光線を一斉発射をしてサバトに全て命中する！サバト「！！！」

大爆発が発生してサバトは消滅したのだった。

全員が変身を解除して、集まる！

響「何とか今日は勝ったけど想像以上にきつかったわね？渡さんどうしたんですか？」

渡「ヴェノイドがまさかサガに変身するなんて思っても見なかったんだ。あれは、元々僕の兄さんの鎧なんだ！」奏「渡さんのお兄さんの鎧ですって！」

エレン「でもお兄さんもキバとして戦っているって話してくれましてよね？どういう事ですか？」

渡「サガは…兄さんがダークキバを手に入れる前に兄さんが使っていた鎧なんだ！まさか敵が使ってくるなんて」

全員が黙りこむ…

しばらくして響がおなかを鳴らす。

「ぐっ」

奏「響ったらもうっ！」

響「アハハ、ゴメンゴメン！まあ、考えても仕方ないよ！先にご飯食べようみんな」

渡「じゃあまた明日キャッスルドランにおいでよ！あとコレ僕の携帯の番号だから、何かあったら電話してね！」

番号の書いた紙を響に渡す！

響「じゃあまた明日ね〜渡さ〜ん」
手を振りながら帰る響達。

渡「うん、また明日！」

渡も手を振る。

キバット「さてそろそろ帰るか！〜それと渡の兄ちゃん呼ばね〜とだめだな〜」

とキバットが言う。

渡「そうだね。」

次狼「俺は他の場所で調査をして情報を集めてくるぜ！渡、いいか？」

渡「うん、わかった！お願いするね」
続く！

グリーンウォーターと珍敵サバトネガトーン？（後書き）

渡「父さん！次回作に出るって本当？」

音也「ああ、渡その通りだ！俺の不思議な話し楽しみにしておけよ！なにしろ……」

キバット「お二人さんよネタバレは駄目だろ！」

ブラッディ・ローズと音也との過去！（前書き）

団の性格が違うかもしれませんが！いつかはDVD借りて見直して修正するかもしれません。

とりあえずスタート！

ブラッディ・ローズと音也との過去！

翌日、響達は学校が終わると、メモに書いてあった、渡の携帯に電話を掛けた。

渡「はい？紅です。あつ響ちゃん？どうしたの？」

響「渡さん、昨日パパに相談したら、是非とも会いたって言うたの！パパは今は学校にいるんだけど直接学校に来てもらえないかって？」

来られます？」

渡は少し困った用に返事をする。

渡「えっ本当に！あつだけど困ったな場所がわからないから行きようが無いんだけど…」

響「それなら、あたしが迎えに行きますよ！渡さん！場所は…」

場所を教えるから数分後、

ブラッディ・ローズを入れたケースを持って渡は教えられた場所でキバットと共に響を待つ。

渡「ここで合っているよねキバット？」

キバット「ああ、間違いないぜ渡！おつお嬢ちゃん来たぞ！」

響「お待たせ！渡さん！あれキバット？一緒に来たの？」

キバット「まあな、敵の居所は次狼が探しているからヒマなんだ。」

響「フーン！そうなんだ。あつ悪いけど、キバットは学校の外から音楽室の窓の方に来てくれる？パパがビックリするかもしれないし」

キバット「おう！良いぜ！さあ行こうぜお二人さん！」

しばらくして響達は学校に到着した。

渡「うん！凄く綺麗な学校だ！」

響「どうもありがとう。さあ、中にどうぞ渡さん！」

するとキバットが桜の木を見つけて喜ぶ。

キバット「おつあの木止まりやすそうだな！よし俺はあそこで昼寝

させてもらうぜ！」

渡「キバット来ないの？」

キバット「ああ、止めておく！それに、ここの葉っぱに紛れ込んだら見つかりにくいだろ？」

響は仕方ないな〜と

表情をしながらこう言う

響「いいけど、その木に帰るまでずっといてよ！見つかったら大騒ぎになるから」

キバット「大丈夫だ！絶対見つかられねえ〜ようにするからふあ〜」

キバットと別れ、音楽室に行く途中で奏とエレンが待っていた。

奏「あつ渡さん、こんにちは」

エレン「ようこそ私たちの学校へ」

渡「うん、ありがとう。2人とも さて、音楽室はどっちかな？」

響「こつちだよ！渡さん」

響の案内に付いて行くと言室にたどり着きさつそく全員が、入るところには北条団が机の上に広げた楽譜を見て待っていたが、みんなが入ってきたので立ち上がりみんなを歓迎する。

団「おつ響連れて来たのかい？昨日話してくれた人え〜と確か？」

響「だから紅渡さんだつてば！パパとぼけないですよ〜」

団「すまんすまん冗談だよ！はじめまして紅くん！響の父親で北条団です。」

手を差しだしてきたので渡も握手をしながら返事をする。

渡「はじめまして！紅渡です。お会い出来て光栄です。」

手を握った団がこう言った。

団「君は毎日ヴァイオリンを引いているね〜手で分かるよ君はヴァイオリニストかい？」

渡「半分当たりですね。確かにヴァイオリニストでもありますが、

ヴァイオリン職人でもあるんです。団さん！」

団「ほう〜それは素晴らしい事だな〜！」

渡「誉められる程ではないですよ。まだまだ両親が作ったヴァイオ

リンを越えてないんですから。」

渡は少しだけ笑いながら言った。

団「さつそくだが君のヴァイオリンを見せてもらえないだろうか？」

渡「はい！」

渡はケースからブラッディ・ローズを取り出した。

団がブラッディ・ローズを見たときに

団「素晴らしい！まさにブラボーだ。こんなヴァイオリン初めてみたよ。名前は何と言うのかな？」

団が目を輝かせて聞いてくる。

渡「ブラッディ・ローズです。良かったらいつも引いている曲を演奏しますよ。」

団「それじゃあ一曲お願いしようかな？」

渡「では！いきます。」

渡はいつも引いている曲を演奏する

全員がうつとりしながら曲を聞く

団「う〜んいい曲だ〜素晴らしい！それになんとも懐かしい曲だ！」

響「渡さん上手！プロみたい〜」

奏「何かとても落ち着いた曲ね〜」

エレン「凄く優しい曲だわ〜」

しばらくして演奏が終わり全員が拍手をする。

団「素晴らしい！ブラボー！名曲だ！素晴らしいよ渡君！」

それとこのブラッディ・ローズ〜実にいい名前だ。素晴らしいよ！このヴァイオリンはツヤがいいし…」とヴァイオリンの事を永遠と話しだしたので響が止める。

響「パパ話し長すぎ！」団「すまんすまん！つついな！しかし実に不思議だ！渡君！君のご両親は実に素晴らしいヴァイオリン職人だったんだね〜」

渡「ありがとうございます。父と母も喜んでいてと思います。団さん」

団「フ〜ンところで君の父親の名前は何かな？もしかしてあの男か

？」

突然、団が渡に聞く。

渡「紅音也です。あの〜父をご存じ何ですか？」

団「やはりな！道理で聞いた事がある苗字だと思っただ。それに今の曲も！」

やつぱり君はあの紅さんの息子さんだったのか〜実に光栄だ〜」

響「パパ！渡さんのお父さん知っているの！」響が顔を団に近づけて聞く！

団「響！顔近いから離れなさい。話すから！ハッハハ」

笑いながら響に言う

団「あれは今から23年前になる。まだ、まりあと会う前の話しだ」

団が過去を話し始めた。

団「私は当時、イタリアである演奏の作曲を担当をしていたんだ。」
若き頃の団は机で明日公演する曲の最後の部分で悩んでいた。

団「ハア〜いいメロディーのアイディアが中々浮かばないな〜よし！少し外の空気でも吸ってくるとしようかな〜？」

団は窓を開けて外の空気を吸って深呼吸する。

団「う〜んいい風だ！気持ちいいね〜！？うん？」公園の方でヴァイオリンの音が聞こえてきたのだ。

団「はて？こんな昼間に公園で演奏の練習でもしているのかな？見に行ってみよう。」

団は部屋を出て公園に行ってみると、男が1人ヴァイオリンを引いていたのだ。

団「ほう〜！見事な腕前だ！日本人かな？」

団は思い切って男に話しかけてみた。

団「あの〜すみません！」

音也が演奏を止める

音也「何だ！今気持ち良く演奏しているところなんだ。邪魔は出来ればして欲しくないんだが、俺に用があるのか？坊ちゃん？」

団「お邪魔真してすみません。あの〜今の曲は〜？」

音也「この曲か？ただの思い付きで引いていただけさ〜さあさあ帰った坊ちゃん？」

団「僕は坊ちゃんではありません。北条団です。団って読んでください。」

音也「全く俺はしつこい男が一番嫌いなんだ！だいたい名前なんて聞いた覚えはないぜ〜？」

団「気を悪くしたのならすみません。さっきまで楽譜を書いていたらあなたのヴァイオリンが聞こえてきたので、素晴らしい曲だと思っただけなんですがお邪魔でしたね。それじゃあ、帰ります。」

団が帰ろうとすると、音也が！

音也「おい！ちよつと待てよ！」

団が振り向き「はい？」と返事をする。

音也「今楽譜を書いているって言ったな！ちよつと見せてもらおうか？君？」

それから2人は団の住んでいるアパートに戻り

団は書いている楽譜を見せる。

団「最後の部分を埋めたら出来るんですよ！え〜と名前は？」

音也「俺か？俺は天才ヴァイオリニストの紅音也だ。俺は普段は音楽と女が好きで男はあまり好きではないが！音楽を愛する者は好きだぜ！しかし良く書いているな〜この楽譜！お前氣にいったぜ！よし俺がお前の作曲を手伝ってやる！」

団が驚く！

団「本当ですか！ありがとうございます。」

音也「んじゃあ、さっそく取りかかるう！う〜んとこの部分なんだが…。」

それから2人は夜遅くまで話し合いをしてついに楽譜を完成させたのだ。

音也「ふあ〜疲れたぜ！だがいい曲が書けたじゃないか！なあ団？」

団「ありがとう音也さん！おかげさまで助かりました！」

音也「まあ天才であるこの音也に任せておけばチョロいものさ！さてと、そろそろ帰るとするか！」

音也が帰る準備を始めようとしたら団が

団「今日は家に泊まって行ってください。もう夜遅いですし！」

音也「気持ちはあるがたいが今日は無理だな。今日はバーで演奏する約束があるんだ。また今度止めさせてもらうぜ！じゃあな！頑張れよ！」

こうして、紅音也は演奏の為に団のアパートを出て行った。団が過去の出来事を話し終える。

そして渡が団に質問をする。

渡「その後、父とは会ってないんですか？」

団「残念だが、彼はバーでの公演が終わった後にすぐ日本に帰国してしまっただけ。あの素晴らしいヴァイオリニストにはその後一度も会ってないよ！ところで、今音也さんは元気かい？」

渡「母が教えてくれたのですが、父は23年前に病気で亡くなっています。」

団「そうか。残念だな。実にいい腕を持つ男だったのに。はあ。」

渡「でも父は喜んでいてと思います。団さんに会えた事を！」

渡が団にお礼と感謝を言う。

団「ありがとう渡君。」

しばらく沈黙した後、響が時計を見て団に教える！

響「パパそろそろ時間だよ！」

団「おつといけない！そろそろ部活の練習時間じゃないか！渡君も良かったら見学して行くかい？」

渡「はい！喜んで！」

こうして渡達は団の部活の練習を見学して行くのだった。

渡「父さん、父さんは他の所でも人の心の音楽を聞いていたんだね。」

渡はこう思いながら、演奏を聞いていた。

続く

ブラッディ・ローズと音也との過去！（後書き）

次回はいよいよガールフォーム登場です！お楽しみに！

怒りのブルームーンと奏の苦手な物？（前書き）

オリジナル設定で奏は蜘蛛が苦手と言ってます。

まあ、実際はわかりませんが

それとプリキュア達はひどい目にあいます。

ではスタートです

怒りのブルームーンと奏の苦手な物？

学校の部活が終わり、団は響達が音楽室を出て行く前に言った。

団「また来てくれるかい？もつと音楽について語り合いたいから」
渡はうなずきながら

渡「わかりました。時間がある時にまた来ますね。」

と言った響達は学校の外に出てキバットを迎えに行く。

キバットは木の葉でぐっすりと寝ていたので響が起こす。

響「キバットく起きて！帰るから！」

キバット「ふあくようお嬢ちゃん！終わったのかい？」

響「うん！さあ帰ろう〜」

こうして全員で学校の門を抜けて帰り道を歩き始めた正にその時！
町の方から人々の悲鳴が聞こえてきたのだ。

響「今のは何！」

奏「多分町の方からよ！何かあったんだわ！」

エレン「今回もダークファンガイアの仕業かしら？」

渡が首を振る

渡「違うと思うよ！ブラッディ・ローズは音を出してないし」

確かにケースからは何も聞こえて来ない。

響「と言う事はマイナーランドの仕業ね！」

キバット「とりあえず町に行こうぜ！」

全員が町に向かって走る。途中でラモンとリキに会いケースを2人に預けた。

ラモン「僕たちはキャツスルドランに戻るよ。調べた事をまとめて報告するから」

渡「わかった！頼んだよ2人とも」

2人と別れて全員町に到着してすぐに啞然とする

3人「なにコレ〜！」何と町の人々がピンク、イエロー、ブルーの蜘蛛の巣に繭にされた状態で縛り付けられていたのだ。

キバット「ひでえな〜とりあえず俺が助けて…」
渡がキバットを止める。

渡「キバット辞めた方がいいよ！この糸見た感じだけど凄く丈夫に出来ている。触ったら一瞬で動けなくなるかもしれない！」

バストドラ「その通りだ！プリキュア！仮面ライダー！」

バストドラ達が三色の体を持つ巨大蜘蛛ネガトーンに乗って現れる！

響は巨大蜘蛛ネガトーンを見て

響「うわあ〜気持ち悪い〜！ナニよその蜘蛛〜！」

奏「くつくく蜘蛛〜！いや〜！！なんで蜘蛛なの〜！」

奏がパニツクになる！

エレン「奏！どうしたの落ち着いて！」

渡「奏ちゃん大丈夫？落ち着いて一体どうしたの？」

響「忘れてた！奏は蜘蛛が苦手なの〜！しっかりして奏！」しばらくして奏がやっと、落ち着いた。

奏「う〜よりによつてこんな気持ち悪くて最悪な奴と戦うなんて〜」とても嫌そうな顔で蜘蛛ネガトーンを見つめる奏。

キバット「まさか蜘蛛で人を襲ってくるなんてな！とにかく害虫退治だ！」

バストドラ「やれる物ならやってみろ！」

ニヤと笑いながら言う。

響達「みんなを困らせるなんて絶対に許さない！」

響達はキュアマジョーレを構えて変身する！

3人「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！」

メロディー「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアマロディ！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

ビート「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

メロディー達「届け、3人の組曲！スイートプリキュア！」3人が決めポーズをする！

渡「いくよキバット！」

キバット「よっしゃ〜キバって行くぜ！ガブ！」

渡がキバツトを構えて叫ぶ

渡「変身！」

渡はキバに変身し走りながら戦闘体制のポーズを決める！

バストラ「ゆけ！蜘蛛ネガトーンよ！」

ネガトーン「ネガトーン」

蜘蛛の糸を放ち攻撃をしてるので全員かわす！

キバとメロディーとビートはキックで反撃をしようとしたが糸が邪魔なので反撃が出来なかった。

キバ「糸が邪魔で反撃が！」

メロディー「どうすればいいの？」

ビート「遠距離から攻撃はどうかしら？」

キバ「よし！キバツト！バツシャーだ！」

キバツト「駄目だ渡！まだバツシャーの体力が回復してねえ」

キバ「そうだった！彼らは闇の契約無しで力を貸してくれる分体力を大きく消耗するんだった！」

一方のリズムはよけてばかりで反撃すら出来なかった。

リズム「うっやっぱり気持ち悪い！えっちよっ！！」

次の瞬間！イエローの蜘蛛の糸がリズムの足に張り付く！「ビトツリズム「いや！離して！」またパニックになるリズムだったが時既に遅し！ネガトーンがイエローの糸を引っ張りリズムを釣り上げてしまう！」

メロディー「リズム！今助けるから！くっ」

ビート「危ないメロディー！」

糸が飛んできたので全員かわす。

リズム「いや！辞めて！」何とネガトーンはパニック状態のリズムを足から糸をだしながら器用に使ってイエローの糸でグルグル巻いていきあつという間に顔と首以外をイエローの繭にしまい巢に貼り付けてしまったのだ。

リズム「いや！助けて！」

まだパニック状態のリズムは繭を破ろうと必死で体を動かしているが

糸がかなり頑丈なので中々脱出が出来ない。

リズム「助けて〜皆〜！」と叫んだ直後そのまま気絶する。

メロディー「リズム〜！くっよくもリズムを許さないわ〜！しっしまった！ああ〜」今度はメロディーがピンクの糸に足を取られて、そのままネガトーンにリズム同様ピンクの繭にされてしまいリズム同様に巣に貼り付けられた！

メロディー「もう〜なんて丈夫な糸なの！全然切れない！」

必死に繭の中で暴れるメロディー

ビート「メロディー〜！」

キバ「なんて事だ！早く助けてあげないと！だけどハンマーでは攻撃は届かないしそれにマグナムは使えない！どうすれば！」

キバット「となるとやっぱりあれしかないな！」

キバ「う〜ん！」ビートとキバは何とかして繭にされた2人を助ける方法を考えていた。するとビートがひらめいた！

ビート「そうだわ！ラブギターロッド！おいでラー！」すぐにラブギターロッドを取り出すとラーイーを差してビートソニックで2人を助けようとする！だが！ブルーの糸がギターロッドに命中してロッドが放り投げられてしまった！

ビート「しまった！きゃあ〜〜！！」

後ろからの糸をよけきれず、ビートはブルーの糸に捕まりブルーの糸で2人と同じ繭にされてしまい同じく巣に貼り付けられてしまう！

ビート「もう〜最悪よ！これ、ほどこいてよ〜」

ビートも繭の中で身体を動かして暴れるが糸は切れない！

バストラ「これで残りは仮面ライダーだけだな！ハッハハ〜どうだ蜘蛛の糸の強さは！プリキュア共！コレまでの借りを返してやる！覚悟しろ！ネガトーンやれ！」ネガトーンが3人襲いかかるうとした瞬間キバが巣かわしてジャンプキックでネガトーンを蹴り倒す！
2人「キバ！助けて〜」

キバ「よくも皆をひどい目に！絶対に許さない！キバットいくよ！」
怒りで強く拳を握りながら叫ぶキバ！

キバット「よし！コイツの出番だぜ！渡！ガルルセイバーだ」

キバはガルルフエツスルをキバットに吹かせる！

キバット「ガルルセイバー！」青い彫像が飛んで来てキバが左手で掴む。すると彫像の形から狼の顔に変形して三日月の形の刃も変形する。次にキバの左腕と肩が青い狼の毛並みのような装甲に置き換わり胸の鎧も青い物に変わる！

最後にキバットの目とキバの目が青くなり青き剣士キバガルルフォームになる！

キバGF「うゝガウゝ！ふん！」

と荒々しく剣を肩に担ぎ唸る！

バストラ「何だこのキバは！話しに聞いてないぞ！」

キバGF「黙れ！欲も彼女達にひどい目にあわせたな！絶対にお前達を許さない！うおゝ！」

キバGFがネガトーンに攻撃を開始する！

バストラ「こうなったらヤケクソだ！いけゝネガトーン！」

ネガトーンは蜘蛛の糸でキバGFの動きを封じようとするが、キバGFあまりにも素早く避けるので全然当たらない！

次にネガトーンはあちらこちらに糸を発射するがガルルセイバーを巧みに使い糸を全て切り裂く！

最後にネガトーンの上に飛び乗って全ての足を切り裂いて動きを封じる

バストラ「嘘だゝ鋼鉄の糸があつさりどうなっているんだゝ！！！」

キバット「残念だったな！ガルルセイバーは鋼鉄すらバターみたいに切り裂く事が出来るんだぜ！そんな糸が効くものか！！！」

メロディー「凄ゝい あれがガルルフォームの力なんだ！って早く助けてくれない？いつまで待たせるの！」

キバット「おつと済まないお嬢ちゃん！今助けるぞ！」キバGFはガルルセイバーを狼の形をした柄を前に構えて後ろの部分を強く押す！するとガルルセイバーからハウリング・ショックと言う音撃破が発生してネガトーンとバストラにダメージを与えプリキュア達と

町の人々の糸が引き裂き全員を救出する！
メロディー「助かった〜ありがと〜キバ」
ビート「一時はどうなるかと思っただわ！リズム？ちょっと大丈夫？」
リズムはまだ気絶していた。
メロディー「リズム！よくも私達をひどい目に合わせたわね・」
指をパキパキと鳴らす。
ビート「あんた達だけは倒す！」
同じく指をパキパキと鳴らす。
キバGF「覚悟しろ！お前たち！」キバットにガルルセイバーを嚙
ませてパワーを送る
キバット「行くぜガルルバイト！」
キバGFがガルルセイバーを口に加えて走りだす！
バストラ達とネガトーン「ひい〜！」
メロディー「奏でましょう！奇跡のメロディーミラクルベルティエ
！おいでミリー」
ビートはラブギターロッドを拾って！
ビート「おいでソリー」
2人「駆け巡れ、トーンのリング！
メロディー「プリキュア！ミュージッククロンド！」
ビート「プリキュア！ハートフルビート！ロック！」
2人の技が命中してからキバGFのガルル・ハウリンググスラッシュ
も同時に炸裂する！
2人「三拍子！1・2・3ファイナルレ！」音符の浄化に成功し残り
はマイナートリオ「覚えてるよ！えっ？」
マイナートリオ「覚えてるよ！えっ？」
キバがキバフォームに戻りウエイク・アップフェッスルをキバット
に吹かせる！
キバット「ウエイク・アップ！」
音が流れ右足のヘブンスゲートが開く！最後に右足を高く上げてキ
バ単体の必殺技の体制に入りながら

キバ「言ったはずだ！お前たちは絶対に許さないって！受けてみる！ハア〜」

キバは飛び上がりダークネスムーンブレイクをマイナートリオに炸裂させる！

トリオ「ぎゃ〜！」と吹き飛び空高く消える！

メロディー「ふう〜スッキリした！リズム大丈夫！しっかりして」
リズム「う〜ん！あれどうなったの？」

このあと全員が変身を解消してキャツスルドランに戻る。

奏「う〜2人と私に糸がまだ付いている〜？」

響「大丈夫！何も付いてないから！」 エレン「もう終

わった事だし 気にしない奏」

奏「うん ハア〜」

全員がキャツスルドランに入り居間に行くと次狼、ラモン、リキの他に男がいた！

渡「兄さん！来ていたんだ」

太牙「ああ、今先ほど到着したんだ。久しぶりだな渡！」

響「この人が渡さんのお兄さん！え〜！」

続く

怒りのブルームーンと奏の苦手な物？（後書き）

奏「ちよつと作者さん！なんでわたし達をひどい目にあわせるの？」「いやゝ偶然ですよゝ昨日バイトしていたら蜘蛛を偶然見かけてすぐ、にこのストーリーを思いついたんですよ！奏さん！ちよつと落ち着いて！」

奏「もうゝ！そんな思い付きは絶対に許さない！待てゝ！」

ぎゃあゝ！許してゝ じつ次回は太牙のエピソードですゝお楽しみにゝひいゝ

奏「待ちなさいゝ！」

新たな武器と敵の目的！そしてイクサ爆現！（前書き）

新しい武器とイクサ登場です。後黒幕の謎が一つ明かされます。ではスタートです

新たな武器と敵の目的！そしてイクサ爆現！

太牙「君たちは一体誰なんだ！なぜキャツスルドランの中にいる？」
椅子に座って腕を組み怖い顔をしながら渡に聞く

渡「彼女達はこの世界の戦士プリキュアだよ兄さん、ダークファン
ガイアとの戦いの時に助けてもらったんだ。」

響「さつきは逆に助けてもらったけどね。」

太牙「何！この子達が戦士だと！信じられない本当なのか！」

太牙は驚いて立ち上がり渡に聞く

渡「うんそうだよ。兄さん」

太牙はしばらく沈黙した後

太牙「お前が信じている仲間なら僕も信じるよ渡！」

渡「ありがとう兄さん！」

2人は微笑みながら話しそして太牙が自己紹介をする。

太牙「皆はじめまして！登太牙です。どうぞよろしく。」

3人も自己紹介を済ませてからある事に気が付く。

響「登太牙？あれ？苗字が違う！」

奏「それに渡さんとお兄さんあんまり似てないわ〜どうして？」

エレン「言われてみれば！」

太牙「僕と渡は母さんは同じだが父親が全く違う人物だからな。似てないのは仕方ない事だ」

3人が「えつて」顔をする

渡が続けて説明する。

渡「兄さんの父親は以前のファンガイアのキングだったんだ。だがその父親は僕の父さんと戦って死んだ。」

そして僕達の母さんは以前はファンガイアのクイーンだったんだ。」

太牙「僕はその後嶋さんと言う人の所で育てられ、今僕はファンガイアと人間が共存する為の物を作る会社の社長をやっているんだ。」

渡「後は前に話した内容と一緒にだよ。」

奏「て言う事は2人とモファンガイア何ですか？」

奏が最もな質問をする。

渡は首を振り話す

渡「兄さんは完全なファンガイアだけど、僕は人間とファンガイアのハーフなんだ。」

エレン「ハーフ？えつつまり2つの種族の血が混じっているって事？」

太牙「ああその通りだ。渡は今両種族の懸け橋なんだ。そのおかげで僕達の世界ではハーフの人々が増えているんだ。」

3人「スゴ〜い」

3人は顔を輝かせているとラモンが「オホン」とわざとせき払いをする。

太牙「ラモンどうした？」

ラモン「そろそろ敵の目的を話していいかな？待っているの疲れたし、いいでしょ！？」

渡「じゃあ報告頼むよラモン！」

ラモンがこれまで調べてきた事を話す。

ラモン「ダークファンガイアに変装して潜入調査をしたおかげでダークファンガイアの本当の目的大体わかったんだ。アイツらはまずこの世界を乗っ取って次に僕達の世界を攻撃するみたいだね。、ちなみに敵の居場所ほとんど次狼が見つけたけどね。」

響達は驚き動揺する

響「なんで私達の世界を支配する必要があるの！」

次狼「そこまではわからんな！だが有力な情報はいくつか手に入れたきたぞ！リキ！お前が整理した敵のデータが入ったノートパソコンを持ってきてくれ」

リキ「ウム……」

エレン「あれリキさん外で捜査してたんじゃない？」ラモン「リキはパソコンのデータ作成担当なんだ！さっきはお腹すいたからバナナを

食べたと言って言うから買いに出てただけだよ」

キバット「リキ！お前はゴリラか！！なんでバナナなんだ！

キバット「息子よ静にしろ！説明が聞こえにくいだろ

響達「あなた誰〜！？いつの間に？」

キバット「俺の父ちゃんだ！いつの間にいたんだ？父ちゃん」

3人「え〜！ウソ〜！」

キバット？は怒鳴る

キバット？「始めから私はいたぞ！このバカ息子が！ポカリ！」

と羽でキバットを殴る！

キバット「父ちゃん何も殴るなよ！痛いんだから！父ちゃんの羽！」

キバット？「全く！俺は強く殴ってない！」

響達「キバットにお父さんがいるなんてしらなかったわ」

キバット？「俺はキバットバット？世だ。よろしくなお嬢さん」

奏「こんにちは二世さん」

一方そんな事は気にせずリキはパソコンを置く！

リキ「はい！どうぞ！パソコン」

響「キーボード太い！」

奏「これリキさん専用？」

リキ「俺力がありすぎてすぐ物を壊すから特注品で作ってもらった。

「
リキ専用ノートパソコンのキーボードは通常の二倍の厚みがあり画面もかなり大きい物だった

しばらくして全員がコピー機で印刷した敵の居場所が書いてある紙を読み奏が話します。

奏「だけど、これだと探すのに時間がかかり過ぎるかもしれませんよ。敵もいつまでも同じ場所にいる訳ないし」

太牙「確かにな！だがヤツの正体だけはわかったぞ！」

奏「もしかしてヴェノイドの事？」

奏はあの時に出会ったファンガイアの事を太牙に説明する。だが太牙は首を振り否定する

太牙「いや、そいつは弟だ！兄の名はヴェルエイド！僕と同じスネーク型のダークファンガイアなんだ！色々調べた結果アイツらはかつて父に弟子入りをしていた。そして奴らは父からの遺言を実行していた事がわかったんだ。」

次狼「なるほどな、アイツは前のキングの遺言に従ってファンガイアだけの王国を作るつもりなんだな！」太牙が頷く。

太牙「リキの報告書で読んで知った事だが何故弟がサガの鎧を使えるのかと言うと、僕の父がサガを造らせた段階で自らの計画が万が一失敗した場合に次の計画を発動する用にされていたんだ。」

渡「だからヴェノイドはサガが使えたのか！」

太牙「だからこそ奪い返す必要がある。」

渡「わかったよ兄さん！必ず奴らを止めよう！」

太牙は頷きそして…

太牙「実はもう一つあるんだ。この戦いで役に立つ新しい武器が完成したから持ってきたぞ！」
指を鳴らすと黒い服を着た男が現れ大きな箱と細長い箱を置いて出ていく

大きな箱には渡宛てになっており細長い箱は太牙宛てだった。

渡「新しい武器？何だろ？」渡は箱を開けて中身を見る。箱の中身には赤いキバの紋章が入った金と黒の盾が入っていたのだ。持ち手の装飾には緑色の魔皇石が付けてあり盾の真ん中には何故か空洞になっている。

渡は持ち上げながら話す。

渡「凄い！だけどなぜ空洞の場所があるの兄さん？」

太牙「ザンバットソードがびったり収まる用に造らせたんだ。入れてみる渡。」

キバットがザンバットソードを何処からもなく出してくれたので、ザンバットソードを受け取り盾に収める。剣はびったりと収まりザ

ンバットも綺麗にハマった。
キバット「おゝすげ〜！一体この盾なんなんだ？」

太牙「ザンバットシールドだ。ザンバットソードのパワーをより高める為に最高の武器職人に造らせた。」

渡「ありがとう兄さん！大事に使うよ。」

奏「そつちの箱は太牙さん宛てだね。」

太牙「ああ」

次に太牙が自分宛ての箱を開ける！

中にはザンバットソードと同じ形をした剣が入っていた。

渡「兄さん！それって！」

太牙「ああ、ザンバットソードだ。僕専用にもう一つ造らせたんだ。ただ普通の魔皇石がなかった為代わりに全て黒い魔皇石を使っているのが渡との違いかな？」

太牙はダークザンバットソードを鞘から抜き手に取る。

ザンバットソードはザンバットがついてなかったが刃の部分が黒かった。

響達「綺麗な剣ね〜」太牙はブラックザンバットソードを見ながら満足げに鞘に戻す。

渡「所で名護さん達は？」

太牙「彼らはキバの世界に残ってダークファンガイアと戦っている。素晴らしき青空の会全メンバーと共存を望むファンガイアがいれば残ったダークファンガイアは全て倒すと言っていた。」

響達「素晴らしき青空の会？名護さん？って誰？」

渡「兄さんの育ての親の嶋さんが対ファンガイア用組織として立ち上げた組織の名前だよ。今は人間とファンガイア共存の為に力を貸してもらっているんだ。名護さんはその組織のファンガイアハンターであり第2親衛隊の隊長なんだ。」

響「凄いわね〜名護さんは」

エレン「名護さんは人間ですか？それともファンガイア？」渡「名

護さんは人間だよ。

奏「その名護さんもキバの鎧を使って戦っているんですか？」

渡「いや名護さんはキバじゃなくてイクサシステムを使っているんだ！キバの鎧は人間では危険過ぎるからね。」

エレン「イクサ？」

太牙「素晴らしき青空の会が開発した対ファンガイア戦闘用スーツの事だ。現在は量産型も出ている。」

渡「写真あるから見せてあげるよ。」

しばらくして三枚の写真を机の上に置き三人に説明する。

渡「仮面の金の部分を閉じているのがセーブモード。パワーを押さえている姿だ。」

次に金の部分を開いているのがバーストモード。パワーを最大まで上げた状態だよ。

最後は全身と顔が変わるライジングイクサ。全てのプロテクトを除いてシステムを常に最大に利用出来るんだ。」

奏が疑問に思った事を聞く

奏「最初からバーストモードを使わないのは何故ですか？」

太牙「嶋さんから聞いた話だが、イクサにはイクサエンジンと言う専用エンジンが搭載されている。いきなりバーストモードを使うとオーバーヒートを起こすらしいからセーブモードを最初に使うらしい。」

奏「じゃあライジングイクサもバーストモード同様に直接変身出来ないんですか？」

渡「ライジングはイクサの完成体だから直接変身が可能だよ。」

奏「ふ〜ん」

こんな会話をしている頃キバの世界では名護達がダークファンガイアと対人していた。名護「みんな行くぞ！」

恵「了解！名護君」

ケンゴ「よっしゃ〜いくで〜隊長さん！」

隊員達「了解です名護隊長！」

全員がイクサナツクル取り出してケンゴ以外手に押し付けケンゴは足に押し付ける！

ナツクル「ピコ！Ready！」

全員「変身！」

一斉にベルトのバックルにセットし名護以外は共通の音が出る

名護のベルト「Raijingu！」

恵達「Fisuto・on」

名護はライジングイクサに

恵達はイクサを量産型に改良した仮面ライダーイクサT2に変身したのだ。

ライジング「各部隊攻撃開始！ダークファンガイア！その命神に返さない！」

続く！

新たな武器と敵の目的！そしてイクサ爆現！（後書き）

次回は本編をお休みします。

その代わりライダーの設定やプリキュア側の登場人物の紹介でもやろうかと…
ではまた

登場ライダーと武器の設定（前書き）

昨日寝る前にまとめて置いたからすぐに出来ました。

嶋先生いつも感想ありがとうございます。おかげさまで元気に作品作りが出来ます。

では「ピコ・ready」スタート！

登場ライダーと武器の設定

仮面ライダーキバ

原作同様、紅渡がキバットを使って変身するライダー！

ただしキバフォームとエンペラーを除く他のフォームはアームズモンスターの体力がない時には変身不可能となる。理由はモンスター

自身が闇の契約無しで力を貸す為普段以上に体力を使ってしまい疲労してしまう為である。【ただし体力が、まだあれば使用は可能】次のリストは体力の高い順である

ドツガ 3日連続使用可能、連続使用した場合は体力が完成回復まで三週間かかる。

ガルル 2日連続使用可能 連続使用した場合は完成回復まで二週間かかる

バツシャー 1日一回

最も体力が少ない為
体力が回復するまで2日かかる。

ザンバットシールド

本作オリジナルの武器

太牙が渡に送った新しいエンペラーフォーム専用武器

ザンバットソードの力を三倍まで強化させる機能があり、盾としても強くドツガフォーム以上の強度を持っている。

見た目はコウモリの羽を広げた用な形をしており中心に赤いキバの紋章が付いており真ん中にはザンバットソードを入れる穴が開いている。

その後ろに付いている持ち手には緑色の魔皇石が付いている。
カラーは金と黒。

仮面ライダーダークキバ

登太牙がキバット二世の力で変身する闇のキバ。能力は原作同様だがシールフェッスルが全てキバと同じ物に変更されている。その為アームズモンスターを武器として使用可能になった。【色はシールと同じ金】

ダークザンバットソード

本作オリジナルの武器

通常の魔皇石ではなく貴重な黒の魔皇石で刃が造られたザンバットソード。

刃の色が黒いのとザンバットが付いてない以外はザンバットソードと同じだが切れ味がザンバットソード以上に凄まじい為使い方を間違えると使用者を殺してしまうほどの力がある。別名【死の黒剣】

仮面ライダーサガ

ヴェノイドがサガークの力を使って変身した姿。スペックは原作同様であるが変身者のヴェノイドが銃使いであるためジャコーダーではなくサガークガンと言う新しい武器を使う。

尚ヴェルエイドがあるフェッスルを使用するとサガの究極の力が発動する用になっている。

サガークガン

サガ専用に開発された銃。バッシャーマグナム以上の連射力を誇る。必殺技は持ち手をの部分に付いているフェッスルをサガークに吹かせて放つサガークフアング。

仮面ライダーイクサ

原作同様、名護啓介が変身するライダー！

原作同様直接ライジングイクサに変身する。さらに改良が加えられて素晴らしき青空の会以外が装着出来ないようにプロテクトが追加された。万が一登録者以外が使用すると【error】と音声が発

生して十五万ボルトの高圧電流で不適合者を強制排除するトラップが仕掛けられている。

仮面ライダーイクサT2【タイプ2】

イクサの戦闘データを生かして造られた量産型イクサ。基本性能は通常のイクサより劣るが、装着者のスペックで能力が上がる。

パワードフェッスルが無い代わりにキャノンフェッスルが装備されている。

武装は通常の装備の他にイクサキャノンと言う大型銃が装備されている。

見た目は装甲が黒くスーツの一部が白い。マスクがセーブモードと同じ用に閉じておりカスタマイズしない限り他のモードは使用出来ない！

この姿はセーブモードでは無くガードモードである。

通常イクサ同様に登録者以外の装着が出来ない用に同じプロテクトが施されている。また使用ソフトも通常と同じ物だが音声プロトイクサと同じ物になっている。

イクサキャノン

量産型イクサ専用の武器。バスターモードの威力はザンバットソード並みの破壊力があり、折りたたむとマシンガンモードになり連射力が高い銃になる。持ち運びする場合はマシンガンモードで運用する。キャノンフェッスルで放つ技はイクサブレイクショット！

恵専用イクサ

名護恵に合わせてカスタマイズされた量産型イクサの初号機。バーストモードが入っており性能が通常のイクサと同じになっている。イクサキャノンとキャノンフェッスルが無い代わりに専用武器イクサボウガンとボウガンフェッスルが装備されている。

イクサボウガン

素晴らしき青空の会共通武器をイクサ用に改造した物。破壊力が大きく強化されている。

必殺技はイクサアローショット！

健吾専用イクサ

健吾用にカスタマイズされた量産型イクサ。

武器は量産型のままである以外は恵専用と同じくバーストモードが使用出来る。パワーではこちらの方が高い！

登場ライダーと武器の設定（後書き）

次回は登場人物2をやります。お楽しみに！

キバット「噛ませろ！お前の首！」

キバットさん！なんで俺なんですか？ 「ダッシュ」

キバット「逃げられた！待て！」

登場人物2プリキュアとキバ（前書き）

お待たせしました！登場人物第2弾です

登場人物2プリキュアとキバ

スイートプリキュア

北条 響

原作同様、おつちよこちよい部分もあるが、正義感が強い少女
今作ではキバと共闘して行く！

南野 奏

原作同様、響の幼なじみ！
しっかりしていて、怒ると怖い！
今作オリジナルで、蜘蛛が苦手になっている

黒川 エレン

原作同様、セイレーンが人間の姿のままになっている。
ダイケイドと共闘した時から何故か自己紹介すると学校の時の自己
紹介になってしまう！

北条 団

性格は原作同様である
今作では昔イタリヤで音也と会っていた
事になっている。
響の父親である

キバの登場人物2

紅音也

原作同様に女と音楽を愛する渡の父親
今作では団の昔話の中で登場！

後に魂だけで渡達を救う？

名護 啓介

原作から三年経過しているが、あまり変化がないと思いきやだいぶ人間らしく思いやりも見せるようになった！

現在はイクサ隊の隊長である。

今作でもライジングに直接変身してダークファンガイアと戦う。後に渡の援護をする為に嶋の命令でスイートの世界に行く！

名護 恵

原作から三年経過した今でも夫を名護くんと呼んでいる。

今は、イクサ隊で副隊長をつとめて自分専用イクサに変身する。

襟立 健吾

原作から三年経過しているためギターは普通に弾けるレベルまで回復した！

今作ではイクサ隊の第2副隊長である

自分専用のカスタマイズイクサを使用する！

嶋 護

原作から三年経過しており太牙とは仲直りしている。

今はファンガイアと人間の共存する為にイクサ隊を作り一般人の間やファンガイアを守る為に戦っている！

素晴らしき青空の会に協力するファンガイア！

日野英司

イクサ隊のメンバーの一人でファンガイアである！

仲間や家族を守る為に悪のダークファンガイア達と名護達と共に戦う！

名前は仮面ライダーオーズの主人公、火野映司のオマージュ！

登場人物2プリキュアとキバ（後書き）

次回は本編再開です

イクサ隊の勇士お楽しみ～

キバ&mp・イクサ対タークファンガイア!!名護プリキュアの世界へ(前書

一部修正版です。

ではキバってスタート

キバ&イクス対ダークファンガイア！！名護プリキュアの世界へ

イクサT2達「うお〜」

イクサT2達はイクサキャノン/マシンガンモードで連射を始めダークファンガイア達に総攻撃を開始する！【ズドドド！ガガガ！】

*凄まじい銃声音になる。

ダーク達「ぐわあ〜」

半分近くが倒されるが残りが襲ってきた！

ダーク達「奴らを殺せ〜！」

ライジング達が走りながら残りに攻撃を開始する

ライジング「恵！健吾！行くぞ！フン！ハア！」

イクサカリバーで切りき裂く！【ズバツン！】

ダーク「ぎゃあああ！」

恵イクサ「任せて名護くん！ハア〜」

イクサボウガンでまとめて複数を打つ！

【ドス！ドス！ドス！】

ダーク「うわあ〜」

健吾イクサ「よっしゃ〜ロックを見せてやるで〜どりやあ〜！」

イクサナツクルで複数のダーク達をまとめて殴り飛ばす！

ダーク「人間ごときに〜！！」

全てのダーク達が転がり床に倒れる

ライジング「全員トドメだ！」

イクサT2「了解！」

イクサT2はキャノンフェッスルをイクサベルトに装填して読み込ませる！

ベルト「IXA・Canon・ライズ・アップ！」

イクサキャノンがバズーカモードに変形して高エネルギー弾を一生発射する！

一方ライジング達はそれぞれの必殺技のフェッスルを発動した。

ライジング「IXA・Karibairais・アップ」

恵イクサ「IXA・arrowライズ・アップ」

健吾「IXA・Nakkuruライズ・アップ！」

全ての必殺技が命中してダークファンガイア達は大爆発を起こして消滅した！

ライジング「終わったな！日野！後ろだ！」

なんと隠れていた一匹が日野イクサT2の後ろから不意打ちをかけて、イクサベルトを奪ってしまった！

日野「いてえ〜！お前卑怯だぞ！イクサ返せ！」

素早くキメラファンガイアに変身する

その姿は頭がタカ！上半身がトラ！下半身がバッタだった。

ダーク「うるせえ！まずはお前をイクサで殺してやる！」

ダークは人間体になりイクサベルトを装着してイクサナツクルに手を押し付ける！【ピコ！ready！】

ライジング「愚かなヤツだ！」

ダーク人間体「行くぜ〜！変身！」

イクサベルトにナツクルをセットしたがそのとたん！【error！】と音声が発生して十五万ボルトの高圧電流がダークに襲いかかる！

ダーク「なっ！\$&+*!::!」と強烈な電流を喰らい！

ダークからイクサベルトがはずれた！

別のイクサT2「今だ！食らえ！【IXA・Nakkuruライズ・アップ】」

ブラウクン・ファングでトドメを差す他の隊員。日野「サンキューな！」

イクサT2「まったく！気をつけるよ」

ライジング「無事か日野？」

日野「はい！隊長！」

日野が人間体に戻った直後にライジングが持つイクサライザーが鳴

る！

ライジング「嶋さんからだ。はい！名護です。」イクサライザーからビジョンの嶋護の顔が映し出したので全員が嶋さんを見る

嶋「名護くん大至急に太牙が使ったオーラを使って、プリキュアの世界に行ってくれ！」

ライジング「何故ですか嶋さん？あちらには渡君や太牙が行ったはずでは？」

嶋「こちらの世界にいた半分近くのダークファンガイアが向こうにむかったとスパイから報告が入ったんだ！だから急いで向かってくれ！今すぐに！」

ライジング「了解しました。嶋さん！すぐに出発します。」

恵イクサ「私も行きます！嶋さん！」

健吾イクサ「俺も行きます！嶋さん！」

嶋「悪いが名護くんだけ行ってくれ！恵君達は生き残りのダークファンガイアを始末して欲しい！やってくれるか？」

恵イクサ「でも！」

嶋「どちらにせよあのオーラはダークファンガイア以外は数日一回に一人ずつしか通れないんだ。わかったな！」

恵イクサ「はい。」

健吾イクサ「わかりました嶋さん！敵の場所を教えてください！」

嶋「場所は 町だ急いで向かったくれ！」

健吾イクサ「了解！」

嶋「頼んだぞ！」

嶋との通信が切れる。

恵イクサ「仕方ないわ。名護くんあっちの世界で頑張ってね！」

ライジング「ああ！任せなさい！恵！健吾後は任せたぞ」

2人は頷くとイクサトライザーと言う強行突破用特殊車両を呼びライジング以外の隊員全員を乗せて次の現場に向かった。ライジングはイクサライザーでイクサリオンをオートドライブで呼び出して乗り、エンジンを全開にして太牙が使ったオーラの場所の前まで役1

時間ぐらい移動した

ライジング「ここか。」イクサリオンに表示されたナビゲーションを見てつぶやき、イクサリオンから降りる。その直後に突然ダークファンガイアが一匹襲って来たのだ！

ダーク「何だ貴様！ここは通さんぞ！」

ライジング「見張りか！そこをどけダークファンガイア！」

ダーク「誰が退くか！死ね〜！」

2人は格闘技やキックとパンチで対決を始めるがライジングが圧倒的に有利に動きダークを蹴り倒して地面に叩きつける！

ダーク「ぐわあ〜」

ライジング「トドメだ！」

ライジングはナックルフェッスルをベルトにリードさせる！

「IXA・N a k k u r u ライズ・アップ」

ライジングはブロウクン・ファングの強化技ライジング・ファングでダークを一瞬の早技で倒す！

ダーク「ぎゃあああ」

ライジング「よし！これで邪魔者は」

ダークが爆発して消えた後、ライジングはイクサリオンに再び乗りそのままオーラに突入する！

ライジング「待っていてくれ渡君！すぐにいくぞ！うお〜！」

名護はこうしてプリキュアの世界に出発して行った。

【場面が変わりキャッスルドラン！】

ちよとどキャッスルドランでは響達がキバの鎧について会話をしていた。

エレン「渡さん後一っ気になっているんだけど、人間がキバに変身するとどうなるんですか？」

渡「人間がキバに変身したら寿命が減るんだ。最悪の場合は死んでしまふ事もある。」

響「そんな！」

シヨックを受ける響

奏「そんなに危険な鎧、渡さんは平気何ですか？」

キバット「大丈夫だお嬢ちゃん！渡や太牙はファンガイアの力を持つているから問題なく使えるんだ。」

キバット二世「また人間がキバに変身したのは例は一度だけだからな。今はいない。」

エレン「人間がキバになった事があるの！！一体誰！？」

エレンはキバット二世に顔を近づけて言った為キバット二世はびつくりする！

キバット二世「顔が近いぞお嬢さん！話してやるから離れてくれ！」

エレンが離れたので話しだす。

キバット二世「闇のキバに変身した人間は紅音也だ。しかも三回もな！」

3人「渡さんのお父さんが〜！！え〜！」

渡「父さんは兄さんをおつてのキングから救う為に闇のキバに変身したんだ。僕はキャツスルドランの力で父さんのいる過去に飛んで共にそのキングを倒したんだ。」

響「えつでも音也さんつて音楽家ですよ？何でキングと戦ったんですか？」困惑する響達。

渡「父さんは愛する母さんと人々の美しい心の音楽を守る為に戦つていんだ」

次狼が懐かしむように音也の事を話す。

次狼「アイツは大切な物を守る為に命を惜しまないヤツだったな！俺が人間を襲っていた頃アイツは俺が惚れた女を一生懸命に1人で守ろうとプロトイクサを俺から盗み戦ったほどだ。」

その後アイツは素晴らしき青空の会の正式メンバーになってプロトイクサでファンガイアと戦い続けていた。

とにかくアイツほど勇気がある男は俺が知る限りアイツ以外いなかったな！」

奏「すごい人ね音也さんは」

エレン「うん本当に。しかもイクサって23年前昔から使っていたんだね。」

響「話し変わってしまったんだけどプロトイクサって何？今のイクサと関係あるの？」

次郎はかつて、テスト装着者だった為3人に教える。

次狼「簡単に言えばイクサの試作品だ。現在のイクサと比べると不安定なシステムだったし俺も運用テストで装着した事がある。」

奏「システムが不安定？」

次狼「まあ、試作品だけにあって完全にシステムが完成していなかっただ。イクサも人体に相当なダメージを与えていたんだが半年が経った頃には大分マシになったがな！」

響「なるほどね〜」手ポン！と納得する。

すると突然机の上のブラツディ・ローズが大きく鳴る！

渡「ダークファンガイア！」

次狼「何？まさかこんなに早く動いたのか！」

3人「え！ダークファンガイア達が？」

太牙「連中が動いてきたようだな！」

「キバット「よし現場に急行だ！」

キヤツスルドランがすぐさま跳びだつて町中に到着する。

町中は百を超えるダークファンガイア達がライフエナジーを町中の人々から吸っていた。

響「町の人々が！」

渡「早く助けてあげないと！」

すると目の前で家族と思われる人々が必死にこちらに向かって来たのだ！

男性「助けてくれ〜うわあああ」

女性「アナタ！きゃあああ！助けて〜」

2人はファンガイア達にやられて先に逃げて来た少年が振り返ってしまう。

少年「パパ！ママ！うわあああこっち来るな〜！！誰か助けて〜！！

！」少年が恐怖で目つぶってしまったのだ！

すぐに渡達が走りながらキバットに

渡「間に合わない！キバットあの子を！！」

キバット「任せろ！オリヤア〜食らえ！」

体当たりで少年を助ける！

キバット二世「貴様らいい加減にしろ！」

二世も体当たりでダークを攻撃して素早く渡と太牙の元に戻り噛みつく！

二匹「ガブ！」

2人「変身！」

2人は走りながらキバとダークキバに変身して戦い始める。

キバ「欲もこの子の両親を！！！」

素早く動きキックやパンチを駆使した格闘技でダークファンガイアを倒していく！

キバ「ハア〜！」

ファンガイア「ぐわあ〜」

ダーク「貴様ら全員に判決する！死だ！」ダークザンバットソードでダークファンガイア達をまとめて切り捨てる！【ズハア！ドシュー！】

ファンガイア「ぎゃあ〜」

少年はガルル達に救助されて無事だったが

少年「ウ〜ン」

少年は気絶してしまったようだ。

響達も走りながらキュアモジュールを取り出して変身する！

響達「みんなを傷つけるなんて！絶対に許さない！レッツプレイ！

プリキュア・モジュレーション！」

3人はプリキュアに変身して名乗り上げて素早くダークファンガイア達に立ち向かう！

メロディー「ハア〜！」素早いパンチでファンガイアを攻めるメロ

ディー！

ファンガイア「うっ！」

リズム「え〜い！」

強烈なキックでファンガイアを蹴り倒す

ファンガイア「グハ〜」ビート「ビートソニック！行け〜！」

ビートソニックで複数まとめて倒すビート

ファンガイア「うわあああ」

だが数があまりも多すぎて中々数が減らない！次第に追い詰められるキバ達！

キバ「くっキャツスルドラン！ブロンブースターを呼ぶしか！」

キバット「ブロンブースター！キャツスルドラン！」

ブロンブースターにキバが乗り込みキャツスルドランがミサイルや

光線で援護を行う！

ファンガイア達「うわああああ！」

キバがブースターでファンガイア達を蹴散らしていると

ヴェルエイド「また貴様らか！我が輩の邪魔をするな！」と衝撃波を出してキバ達を吹き飛ばす。プリキュア達「うう！アイツは誰？」

Dキバ「ヤツがヴェルエイドだ！くっなんて強さだ！」

Dキバは立ち上がり剣を構えててヴェノルイドを睨みつける！

キバ「必ずお前を倒す！」

続く！

キバ&mp・イクサ対ダークファンガイア！！名護プリキュアの世界へ（後書

今回はラストバトル前編です。エンペラーもいよいよ参戦しますの
でお楽しみに！

キバ&プリキュアVSサガ！激闘の戦い！（前書き）

間違って消してしまった文章を何とか復活させました！
ではどうぞー！

キバ&プリキュアVSサガ！激闘の戦い！

ヴェルエイド「我が輩を倒す？無理だな！サガーク！」

Dキバ「サガークだと！グワアア！」突然赤いサガークがDキバに体当たりを仕掛けてきたのだ！

そして腰に装着される

ヴェルエイド「変身」

サガーク「ヘン・シン」

赤い光と共に仮面ライダーサガ ジ・エンドフォームに変身する！

その姿はいつもの白の鎧では無く赤く染まっており、目が黒かった。

Dキバ「なに！」

驚く太牙達！

キバ「赤いサガ！一体？」

サガGEF「これが先代の王がサガに隠していた闇のキバの力を解放した姿サガGEFだ！フハハハ！」

高らかに笑うサガGEFするとDキバはしばらく無言の後

Dキバ「いいだろ！お前を倒しサガは返してもらっぞ！渡、彼女たちと共にダークファンガイア達を頼む！僕は出来るだけ時間を稼ぐ！」

Dキバは自らを囷になり時間を稼ぐつもりらしい。

キバ「危険過ぎるよ！兄さん！僕たちも一緒に！」

Dキバ「心配するな渡！それにこれ以上犠牲者を出したくない！ミオのような悲惨な悲劇を起こさない為に！」

Dキバがかつて愛した女性ミオを思い出しながら言った。

同時にキバもその事を思い出して頷き

キバ「わかった兄さん行こうみんな！」

メロディー「でも！」

リズム「メロディー！今はファンガイアが先よ！ここは太牙さんに任せておきましょう。ね？」

ビート「お願いします太牙さん！」

Dキバ「ああ！頼んだぞ！みんな！うお〜！」Dキバはダークザンバットソードを構えて凄まじい気迫でサガGEFに向かって行った。サガGEF「良かろう！」

サガGEFはファンガイアの怨念から生み出した剣、ジ・エンドソードを取り出してDキバに襲いかかっていき2人は対決を始めた！キバ達はダークファンガイアに突っ込みながら必殺技を発動する

キバ「ハアアア！」

キバット「ウエイクアップ！」

ダークネスムーンブレイクで複数をまとめて倒す

ダーク「ぎゃあああ！」

メロディー&リズム「プリキュア！ミュージッククロンド！」

ビート「プリキュア！ハートフルビートロック！」

メロディー達も必殺技でファンガイアをまとめて倒す！

ダーク「うわあああ！」

だが数が多すぎて次第に追い詰められてしまった。

ダーク「へへへ！どうする？お前たち？」

メロディー「ハアハア！これじゃあ、キリがないわ！」

リズム「力が入らない！」

ビート「くっどうすれば！」

キバ「みんな諦めないで！来て！タツロツト！」

キバットにタツロツトを呼ぶフェッスルを吹かせる！

キバット「タツちゃん出番だぜ！タツロツト！」

独特のメロディーがなる！

三人「タツロツト？」

するとドラムから小型の黄金の竜タツロツトが飛んで来てファンガイアを羽で切りつけて現れる！

タツロツト「読者の皆様！お待たせしました！テンションフォルテッシモ！」

メロディー「なにこの空飛ぶトカゲ？」シヨックを受けるタツロツト
タツロツト「ガーン！キュアメロディーさん酷いですよ！私は竜で
す！トカゲではありません！」

ビート「えっ竜なの？私空飛ぶ亀だと思ったわ」

タツロツト「ガーン！」

さらにシヨックを受けるタツロツト！

リズム「ちよつと2人共？酷いわよ。ごめんなさいタツロツトさん
悪気はなかったから許して？」（-o-;）

タツロツトに謝るリズム

タツロツト「しくしく！良いんですリズムさん、ぐすん！」

半分ベソをかくタツロツト

キバツト「ふざけている場合かお前ら！タツちゃん早く来い！」

タツロツト「わかりました〜！いきますよ〜」 即復活した。

三人「復活早い！」

タツロツトがキバ肩の鎖を外すと光の翼が現れて光のコウモリが現
れる！

ダーク「なっなんだ！」*BGMとしてスーパーノヴァを流してい
ます。

キバが左腕を突き上げるとタツロツトが装着され「変身！」と叫ぶ！
すると光のコウモリがキバに吸収されて新しい鎧を作りキバツトの
目が虹色になりキバの目が赤い色になって三日月型の装飾が施され
て背景に太陽が浮かんだ後、背中赤いマントが現れた

これがキバ最強の姿でありキバの本当の姿であるエンペラーフォー
ムである。

Eキバ「ハア！」

マントをひる返して格好よくポーズを決める

メロディー「格好いい！」

リズム「キレイ〜イ！」

ビート「まるで太陽見たい！」

ダーク「黄金のキバだと！」

Eキバ「お前たち全員に告げる！人間を無差別に襲った罰として全員死罪だ！ザンバット！」

タツロツトからザンバットシールドを取り出して掴みザンバットソードを引き抜く！

この時ザンバットソードは赤く刀身が染まっていた。ザンバットシールドにはザンバットソードを常に最高の切れ味を保つ能力があるのだ。

そしてEキバはザンバットフェッスルをキバットに吹かせる
と必殺技を使う！

キバット「ウエイクアップ！」

ザンバットソードで回転切りを行いコウモリ型エネルギー波でダークファンガイアを一層する！

ダーク「うわあああバカな〜！」

爆発して半数近く減る！

キバット「すげー！パワーが格段上がってやがるぜ！」

キバットが驚きメロディー達もやる気が出てきたらしく

メロディー「スゴ〜イ！よ〜しみんなここから逆転よ！」

リズム「オツケ〜！」

ビート「うん！あれメロディー！ヒーリングチェストが！」

突然メロディーが持っていたヒーリングチェストが光を放ち中からクレッシェンドトーンが現れる！

ダーク「眩しい！何が起こってんだ〜」

キバット「眩しい！何なんだよ！」 眩しいので目をとじた！

Eキバ「あれは一体？」

メロディー達「クレッシェンドトーン！一体どうしたの！」

クレッシェンドトーン「この戦いはプリキュアの世界と全ての世界を守る戦いです。ですから今から新しい力をあなた達に託します。」

メロディー「新しい力？」

クレッシェンドトーン「歴代のプリキュア達の力を宿したレジェントフェアリートーンです。これはあなた達をキュアモジュールを使

って歴代のプリキュアに変身させベルティエやラブギターロッドに
使えば新たな必殺技を使えるようになります。」

メロディー達「えっ本当に!」

クレッシェンドトーン「本当です。さあ戦いなさい!メロディー、
リズム、ビート!」

そう言い残して13体のレジエントフェアリートーンを残して消え
る。

メロディー「リズム!ビート!ここはやってみよう!ここで決め
なきゃ女がすたる!」

リズム「オツケ〜 気合のレシピみせてあげるわ!」

ビート「私たちの心のビートはもう止められないわ!行きましょ
う!」

メロディーとリズムはキュアモジューレを外しビートはラブギタ
ーロッドを持ち叫ぶ!

三人「歴代のプリキュア達よ!私たちに力を貸して!」

メロディーとリズムのキュアモジューレにマックスハートの紋章が
描かれたフェアリートーンがセットされる!

フェアリートーン「マックスハート!」

メロディー&リズム「キュアチェンジ!マックスハート!」

2人が光に包まれてメロディーはキュアブラックにリズムはキュア
ホワイトに変身した!ただしオリジナルと違い胸のリボンにキュア
モジューレがついている!

ブラック「え〜ナニコレ!声以外変わっちゃった!」

ホワイト「なんか不思議な感じがする!」

Eキバ「姿が変わった!一体あれは!」

ビート「よし!私もお願いフェアリートーン!」

フェアリートーン「フレッシュ!」

フレッシュの紋章がついてフェアリートーンがラブギターロッドに

セットされる！」

ブラック&ホワイト

「ビートそのまま必殺技いくわよ！」

ビートが頷いた瞬間！

ダーク「させるかよ！」

ようやく目が回復したファンガイア達が襲いかかって行ったのだ。

Eキバ「させない！」

Eキバがザンバットソードとシールドでファンガイアを押さえる！

Eキバ「僕が押さえている内に！」

ビート「ありがとう渡さん！」

三人は必殺技を発動する！

ブラック「ブラックサンダー！」

ホワイト「ホワイトサンダー！」

2人は手を上げ黒白の雷を手のひらに落としてパワーを蓄えて

2人「歴代のプリキュアの力が邪悪な心を打ち砕く！プリキュア！

マープリュースクリュー！マックス！」

凄まじい光線を放ち一部のファンガイア達を倒して爆発させる！

ダーク「グワアア！」

ビート「凄い力ね！いくわよ！チェンジ！ソウルロッド！プリキュ

ア！ハッピークローバーロック！」

いつものリングと違いクローバー型のエネルギー波で残りのファン

ガイア達切り裂いて倒す！

ダーク「グワアア！」

2人はブラックとホワイトは元の姿に戻る！

メロディー&リズム「ふう〜！」

Eキバ「凄い！これが彼女たちの新しい力か！メロディー危ない」

生き残ったダークファンガイアがメロディーに襲いかかっていく！

メロディー「きゃあああ！」

リズム「メロディー！え！」

突然空中にオーラが出現してバイク音が聞こえてきたと思ったその

時！イクサリオンに乗ったライジングが颯爽と現れる！

ライジング「ダークファンガイア！不意打ちとは卑怯なヤツだ！その命神に返しなさい！」

Eキバ「名護さん！」

ライジングはそのままイクサリオンから飛び降りてイクサジャツジメントでファンガイアを切り裂く！

ライジング「イクサ爆現！」

ダーク「ちくしょう！覚えてろっ！！！」

爆発したダークの衝撃波からライジングは2人を守りぬいた！

ライジング「無事か2人共？渡くん久しぶりだな！」

Eキバ「はい！」

メロディー「リズム「ありがとうございます。え〜と？」

ライジング「名護啓介だ。よろしくなプリキュア達！」

ビート「この人が名護さん！強いこの人！」

メロディー「私たちの事知っているんですか？」

ライジング「ああ！嶋さんから聞いていたんだ。」

その時に、突然リズムが！

リズム「太牙さん危ない！」

Dキバ「グワアア！」

果たして太牙に一体何が？

最終回に続く！

キバ&プリキュアVSサガ！激闘の戦い！（後書き）

次回はいよいよ最終回です。ではまたキバっていきま〜す！
キバット「俺のセリフ〜！」

最終章！絆と魂の音楽の力！（前書き）

さあ！お待たせしました！いつもより多めに書いております。

嶋先生リクエストのメモデー！出せなくてすみません。ですが本作オリジナル形態のプリキュア達が登場します。

では！キバットさん！お願いします！

キバット「よっしゃ〜！！キバって行くぜ〜！！」
スタート！

最終章！絆と魂の音楽の力！

Dキバ「グワアア！」

リズム「太牙さん！」

DキバがサガGEFの剣の強烈な一撃を受けて吹き飛ばされ、火花を散らしながら変身が解除されてしまう！

太牙「がはっ！なんてヤツだ！闇のキバでさえ歯が立たないなんて！」

サガGEF「ふん！弱いな！やはり我が輩がファンガイアのキングに……む！」

Eキバ「ハアアア！」

ガルル「ウオッ！」

バツシャー「ハアッ！」

ドツガ「ふん！」

Eキバがザンバットソードを振り上げて切りかかりガルル達も果敢に攻めようとした！だが

ヴェノイド「させるかよ！【ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！】」

Eキバ「！ウワアア！」

ガルル達「グワアアア！」ヴェノイドが放った銃弾が当たりEキバ達の変身が解除されてしまう！

リズム「渡さん！次狼さん！ラモン君！リキさん！」

太牙「渡！くそ！身体が動かせない！」

キバット「ちくしょう！渡！みんな！大丈夫か！」

渡「くっつなんとか！」

次狼「……」

ラモン「……」

ドツガ「……」

ひざまずきボロボロになる渡

次狼達はその場で気絶していた。

メロディー「欲も渡さんと太牙さんを！」

ビート「絶対にゆるさない！」

ヴェノイド「兄さん僕もそろそろやらせてよ！」

サガGEF「良かろう！お前は小娘共を始末しろ！」

ヴェノイド「ほ〜い」

メロディー「私たちを」

リズム「なめないで！ハア〜」

ビート「え〜い！」

三人は連携でパンチやキックでヴェルノイドを攻撃を加える！

だがヴェノイドは軽々と受け止めてしまう。その為に3人はかなり体力を消耗してしまった。

メロディー「ハアハア！コイツ強い！」

リズム「攻撃は当たっているのに！」

ビート「まるで通用しない！こうなったら！」3人はキュアモジューレを構えてレジエントフェアリートーンを使おうとした。だが！

ヴェノイド「ふん！おせえんだよお前ら！【ズダダダダ！】」

メロディー達「きゃあああ！」

銃で3人に凄まじい銃撃を加えて激しいダメージを3人に与え3人は変身が解除されてボロボロになり地面に倒れながら

響「くっ…そんな」

奏「身体に力が…入らない」

エレン「このままじゃ…うっ！どうすればいいの！」

3人は苦しい表情をする。

渡「響ちゃん！奏ちゃん！エレンちゃん！くっグワアア！」

ヴェノイドが銃身で渡を殴る！

太牙「渡！」

3人「渡さん！」

ヴェノイド「まずは、お前からだ！さっさと死ねよキバ！」

トドメで銃を打とうと、した次の瞬間！吹き飛ばされたライジング

走りながら戻って来て、イクサライザーでヴェノイドの銃を弾いたのだ！

ヴェノイド「グツなんだ！

ライジング「そこまでだヴェノイド！ウオ〜！」

さらにイクサライザーを連射してヴェノイドにダメージを与える！

ヴェノイド「グワアア！」

サガGEF「イクサか！」

ライジング「まだ俺がいる！みんな諦めるな！」

渡「なつ名護さん」

ヴェノイド「なんだ！お前は！」

ライジング「罪なき人々を苦しめるダークファンガイア！例え悪魔が許してもこの名護啓介が許さん！」ライジングはイクサライザーでさらに銃弾を連射する！

ヴェノイド「グワアア！人間ごときに！舐めるな〜！」ヴェノイドはダメージを受けながら、サガークガンを取り出して連射してライジングに反撃する！だがライジングは

ライジング「ぐっ！だが効かないな！」

ヴェノイド「なに！直撃だったはずだ！」明らかにライジングに銃弾は当たっていた。だがライジングは

ライジング「渡君達が受けた苦しみに比べればこの程度なんともない！」

ライジングはイクサカリバーでヴェノイドを一刀両断にする！

ヴェノイド「グワアア！バカな〜」

ライジング「ヴェノイド！その命！神に返しなさい！」

ライザーフェッスルをイクサベルトに入れて読み込ませる！

サガGEF「させるか！ぐっ邪魔をするな」キバットとタツロツトそして二世が攻撃を行い邪魔をする！

キバット「いっけ〜イクサ！」タツロツトを呼び出した時と同じ音が響き渡りファイナルライジングブラストがイクサライザーから発

射される！

ヴェノイド「ぐおおお！」反動でライジングは吹き飛ばされるが壁を蹴ると同時にイクサカリバーを投げ捨てナツクルフェッスルをリードする

「IXA・ナツクル！ライズアップ！」

ライジング「ハア！」

ライジングファンクがヴェノイドに当たりヴェノイドは倒れライジングが【スタツ】と地面に立つ！

ヴェノイド「兄さん…ぐおおお」

と大爆発を起こす！

サガGEF「ヴェノイド…！貴様…！欲も弟を！許さん！許さん！許さん！」

怒り狂うサガGEF一方のライジングは

ライジング「後は任せたぞ、みんな！くっ！」

渡「名護さん！」

ライジングは倒れ変身が解除される！

キバット「おいおい！大丈夫か！」

キバット達が様子を見にくる

名護「…」

タツロツト「意識を失っていますね」

二世「よくやったぞ！人間」サガGEF「ぐおおおこうなったらこの町中のを破壊して全員に思い知らせてやる！」

支配者こそ最強の力だ！」

凄まじいパワーを解放するサガGEF

渡「違う！」渡がふらふらと立ち上がりはつきり否定する！

渡「それは正しい力じゃない！ただの逆恨みだ！そんな力では何も解決出来ない！」

サガGEF「黙れ…小僧！」

手のひらから黒い衝撃波が放たれ渡に襲いかかるうとする！

キバット「渡…！」

タツロツト「渡さ〜ん」

太牙「渡！」

響たち「渡さん！」

その時！ドラムの中にあつたブラッディ・ローズから光が出て来て渡を衝撃波から守るように渡の前に現れる！

渡「これは？…えっ！」

渡の目の前には光輝くプロトイクサがイクサナツクルを構えて渡を守っていた。

渡「父さん！」

太牙「イクサが！光のイクサが渡を守っている！」

キバツト「一体なにが？」

響「あれは名護さんなの？」

奏「違うわ響！あれは名護さんじゃないわ！」

エレン「じゃあ一体誰？」

二世「紅音也の魂が紅渡の命を守っている！」

三人「え〜！」

音也が渡に話しかけてきた！

音也「渡！諦めるな！お前と仲間達にはコイツにはない何かを持っている！分かるか」

渡「魂と心の音楽？」

音也「それも正解だが、もっと大切な物があるだろう！」

渡「わからないよ、父さん」音也「それは絆だ！渡！人の音楽は心と心でつながった時に魂と共に絆を作る！俺が団と一緒に楽譜を作ったようにな」

響たち「絆と魂の心の音楽」

響たちは勇気と戦う気力を取り戻して来る！

渡「わかったよ父さん！ありがとう！」

イクサがうなずき消滅しながら

音也「みんな忘れるな！人には心の絆と魂の音楽がある事をな…！」

渡「父さん……」

消えた光が渡に入る

するとサガGEFが

サガGEF「何が絆だ！何が魂の音楽だくだらん！」怒り狂うサガ
GEF

渡「僕の父さんはくだらない事は言っていない！みんなに戦う力をく
れたんだ！みんな行くよ！キバット！」

キバット「よっしゃ〜！！いつも以上にキバっていくぜ〜！！ガブ
！」

太牙も立ち上がり

太牙「僕もまだ戦える！音也さんの言葉！無駄にはしない！キバッ
ト！」

二世「行くぞ！ガブリ！」

響たち「私たちの絆と魂の音楽であなたを倒す！」

2人「変身！」

3人「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！」

渡と太牙はEキバとDキバに変身し3人はプリキュアに変身する！

メロディー「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

リズム「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

ビート「キュアビート

爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

届け、3人の組曲！スイートプリキュア！」

3人が名乗り上げる！

キバット「よ〜し渡！俺たちも名乗りしようぜ！」

Eキバ「え〜！」

Dキバ「本気か！」

二世「たまにはいいんじゃないか太牙？俺たちだけ名乗り無しは寂
しいしな！」

Eキバ「どうする兄さん？」

Dキバ「いい機会だからやってみるか渡！」

Eキバ「うん…」

Eキバは

Eキバ「絆と魂そして音楽の力で戦う仮面ライダー！キバ！」

Dキバは

Dキバ「闇の力とキングの証を持つ仮面ライダー！ダークキバ！」
と名乗り上げる！

メロディー「うん…イマイチかな？」

キバ達は恥ずかしいと思いながらサガGEFを睨みつける！

Dキバ「まあ！とにかく、僕達の絆でお前を倒す！」

Eキバ「行くよ！ハア〜！」全員走り出してサガGEFに向かう！

サガGEF「良かるう！貴様ら全員地獄に落としてやる！」

メロディー「そうは行かないわ！リズム！ビート！行くわよ！えっ
ナニコレ！」

いつの間にか13個あったレジエントフェアリートンが3つにな
っていたのだ。

レジエント「僕達はそれぞれのプリキュアの力を一つにしたフェア
リートンだよ！さあ使おうんだ！」

3人はうなずき！キュアモジュールにセットする！そして叫ぶ！

3人「伝説のプリキュア達よ！全ての力を貸して！レッツプレイ！
プリキュア・レジエント・モジュールーション！」

3人が光に包まれて、金色の翼と金色のフリルがつき、金のティア
ラを頭にかぶった姿レジエントプリキュアに姿を変える！

メロディー達「爪弾くは伝説の調べ！」

メロディー「レジエントキュアメロディ！」

リズム「レジエントキュアリズム！」

ビート「レジエントキュアビート！」3人「届け！3つの伝説の組
曲！スイートプリキュア！」

三人からは光があふれ出ていて、まるで天使みたいだった！

メロディー「これが！レジエントの力！」

リズム「これならやれるわ！」

ビート「行きましょう！みんな」

三人は必殺技の体制に入る！

メロディー「私たちが先に必殺技を使います。渡さんは後からお願い！」

Eキバ「わかった！」

サガGEF「そうはせん！」

剣を取り出してプリキュア達に向かって走り出し邪魔をしようとしたが！

Dキバ「邪魔はせん！ハア〜！」

Dキバはダークザンバットソードの必殺技を発動させる！

二世「ウエイクアップ4！」

オルガンのような音と共にダークザンバットソードの刀身が黒から銀に輝き、必殺技のファイナルシルバーザンバット斬を放つ！

サガGEF「ぐおおお！」

必殺技を受けて倒れるサガGEF

Dキバ「今だ！プリキュア達！やるんだ」

二世「みんな！力を合わせるんだ！

Dキバは素早くその場を離れる！

メロディー「奏でましょう！奇跡のメロディー！ミラクルベルティエ！力を貸してレジエントフェアリートン！」

レジエント「レジエ」

リズム「刻みましょう！大いなるリズム！ファンタスティックベルティエ！お願いレジエントフェアリートン！」

ビート「吹き鳴らせ！愛の魂！ラビギターロッド！チェンジ！ソウルロッド！来て！レジエントフェアリートン！」三人はレジエントフェアリートンをベルティエとロッドにセットして息を合わせて必殺技を放つ！

三人「駆け巡れ！伝説のリング！プリキュア！レジエント！ミュージックロンド！」ベルティエとロッドから七色に輝くリング発射さ

れ3つのリングを空中に止まらせサガGEFを光で固定する！

サガGEF「なっ何だコレは！ならばコレで終わりにしてやる！」

サガGEFは立ち上がりジ・エンドフェッスルを発動する！

サガーク「ウエイクアップ！」サガGEFは必殺技のジ・エンド・

ブレイクを発動して飛び上がりキックを放つ！

サガGEF「死ぬ〜！！！」

メロディー「キバ！」Eキバは頷きタツロットの頭を引っ張る！

タツロット「ウエイクアップ〜フィーバ〜！」

いつもの赤いオ〜ラと違い光のオーラを放ち、空中に大きくジャンプする！

すると頭の中で

音也「行くぞ渡！」

Eキバ「うん！ハアア〜」

音也「たああああ！」

Eキバは金色のオーラを出しながら両足で虹色のリングをくぐり抜けて虹色のオーラも身にまとい、究極の必殺技エンペラーミュージックダークネスムーンブレイクをサガGEFに放ちジ・エンド・ブレイクを碎きながらサガGEFに放つ！

サガGEF「ぐおおおおお！なっ何だこの力！」Eキバ&メロディ

ー「僕達の（私たちの）絆と音楽の力だ（よ）

サガGEF「グワアアア！」

大爆発と金と虹色のキバの紋章が浮かびサガGEFはサガークを残して消滅する！

メロディー「やった〜！！！」

リズム「私たちが…勝った〜！」

ビート「あれ？レジエントフェアリートーンは？」

ベルティエとロッドにセットされたフェアリートーンはいつの間にか消えてなくなってしまった。

Dキバ「終わったな」

名護「ああ！」

名護も意識を取り戻してDキバの肩を借りて微笑む

Eキバ「ありがとう！みんな！そして父さん！」

空を見上げて、つぶやくキバ！

こうして長い戦いが終わったのだった。

それから次の週の日曜日の朝、渡と響達全員がキャスルドランの目の前にいた

響「もう帰るんですか！もっといればいいのに！」

名護「いやそれは出来ない！俺たちは元々この世界の住人ではない。

それにダークファンガイアはまだ外の世界で暴れているという情報が嶋さんから入ったんだ。」

奏「そうですね…！」

少し寂しそうな表情

をする奏

すると太牙が

太牙「ふっそんな顔をするな、可愛い顔が台無しだぞ？」

奏は顔が真っ赤になりのぼせてしまう。

響&エレン「奏〜！しっかり〜！」

太牙「？何かマズい事言ったか？」みんなが笑う

太牙以外「アハハハ！」

太牙「？何かおかしいんだ！」少し怒った表情をする太牙

渡「兄さん怒らないで、ぷっ」

太牙「渡！お前まで！笑ったな！ふっははは！

みんな再び笑いだす

すると笑い終えた次狼が

次狼「そろそろ行くぞ！オーラが閉じたらヤバいからな！」

キバのメンバーが頷き

キバット「そんじゃあな〜！お嬢ちゃん！また会おうぜ〜！」

ドランに入って行って

羽を振るキバツト

タツロツト「またお会いしましょう！では！」

お辞儀をして中に入る

二世「さらばだ！プリキュアの戦士たちよ！」

同じくドランに

次郎「またなお嬢ちゃん！」

ラモン「じゃあね〜！お姉ちゃん達！」

手を振り中に入る

リキ「さらばだ…ありがとう」

キバツト達が中に入り、名護達も入る前に

名護「短い間だったがありがとう！君たちのおかげだ。それでは失

礼する！」

中に入る前にエレンが

エレン「ありがとうございました名護さん！」

エレンが手を振り名護は頷き中に入る。

太牙「君たちのおかげで目的は果たせた！キングとして礼を言う、

ありがとう。」

奏「いいえ！とんでもない！私たちだけじゃあんな強敵は倒せなか

つたんですから！太牙さん！」

すると太牙は何かをポケットから取り出して三人に渡す。

三人「コレは？」

太牙「魔皇石で作ったお守りだ。今回の戦いに協力してくれたお礼

だ。受け取ってくれみんな。」

それは見事な魔皇石で音符の形をしていたペンダントだった。

三人「ありがとう！太牙さん」

太牙は頷きドランの中に入る。

渡「それじゃあね響ちゃん、奏ちゃん、エレンちゃん また会おう

！」

渡はドランの中に入ろうとすると響が

響「渡さん！あの！」

渡「？響ちゃん？どうしたの？」

響「ううん！何でもない！ありがとう！渡さん」

笑顔で渡に笑う響

渡「それじゃあ、」

渡はドランに入りドアを閉める。

そしてドランが羽を動かして飛び立ちオーラの中に入り消えて行った。

響達は手を振りながら

響「ありがとう！渡さん！」

奏「また来てね〜！！」

エレン「バイバイ」

そして手を下ろす。

奏「さあ！帰ろう響 エレン」

エレン「うん」

響は空を見ながらこう思った。

響「渡さんありがとう…仮面ライダーキバ…また会えるよね？」

奏「？響？」

エレン「どうしたの？」

響「何でもない さあ帰ろう！」

一方オーラに入ったドランの中にいた渡はこう思っていた。

渡「ありがとうプリキュアのみんな！またいつか…」

キバット「おい！渡？何ぼ〜としてるんだ？」

渡「なんでもないよキバット！さあ帰ろう！僕達の世界へ！」

キバット「よっしゃ〜！！」こうして2つの戦士達はそれぞれの生活に戻って行った。

一方響達の知らない間に新しいオーラが出現して新しい建物が出現していた。

建物にはスマートブレインと書かれており、中から響達と同じ年の少年が出てくる。

？「ここが俺の新しい転校先か！」

次回作に続く！

最終章！絆と魂の音楽の力！（後書き）

次回作は仮面ライダー555とのコラボで行きます！

主人公は本編ではなくオリジナルキャラクターでやらせていただきます。

では次回作楽しみに！

next555！新たなライダー！その名は555！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5375w/>

仮面ライダーキバ×スイートプリキュア！重なる2つの組曲

2011年9月30日20時03分発行